

ネヴェリオ才連併国れんべいロットラント州、キャレー廢街。打ち捨てられた街の中の一軒、ランプに閉じ込められた蠟燭の明かりが充滿する地下室で、年老いた男は腰を抜かして何も無い天井を仰いでいた。手入れのされていない脂ぎった薄毛、目ヤニだらけの双眸、砂埃に汚れた衣服……その風貌の通り、男は長い間まともな生活を送っておらず、そう遠くない将来、この部屋でひっそり死のうと身支度を始めていたほどひどく衰弱していた。数年前、首都であるロットラント市街から発生した黒い雨は未だ猛威を振るい続けており、男も甚大な被害を受け、その影響から体の自由が奪われている最中なのである。

黒い雨は毒を孕む。詳しい原理は分かっていないが、雨に直接触れてしまった場合、六時間ほどで細胞の溶解が始まり、患部を切除しない限り侵蝕は進んでいく。処置の遅れた患者は発症から二〜三日のうちに重篤化。その後、数日の間に死亡するケースが非常に多い。さらに、間接的な要因でも症状が現れる。報告例の多くは、黒い雨が降る際に巻き上がった粉塵を吸い込むことによる呼吸器系、循環器系、それらを経由することによる内分泌系の壊死。これらは長期間において毒が蓄積することで発症する事例がほとんどで、患部の切除による進行の阻止は効果薄とされ、これといった治療が行えないのが現状だ。加えて、直接接触による発症者も粉塵吸引から臓器腐食を

起こし死亡することもあるため、雨の正体が単純な細菌感染であるとは考え難いという観点に重きを置き、鋭意研究中といったところである。

人々はこの黒い雨のことを「雨毒」と呼称し、降雨の可能性がある場合は、比較的被害を抑えられる屋内に籠もって生活することを余儀なくされている。そして男は、まさにこの間接的要因による症状によつて、苦しんで死んでいくことを覚悟していた。

雨毒により捨て置かれたこの街では、水やガスなどのライフラインが絶たれてしばらくが経っている。衣類を洗濯するための水道は枯渇しているし、湯を沸かすガスも薪もなくしては、この冷え込んだ季節に風呂に入る気力もない。辛うじて電気の供給だけは享受しているが、それも微々たるもので、際限なく自由に扱うのは無茶な話である。それでも男がこの地を離れずにいたのには理由があつた。

人の手により人を作る——古くより神のみが成せるとされてきた異業。これを自身の手により叶えてみたくて仕方がなく、死のうにも死に切れなかつたのだ。これこそが、ここまで生き永らえている目的といつても過言ではない。とは言え、男には人工生命に関する知識などどれほどもなかつたし、そもそもこの碌ろくでもない夢を抱いたのも極々最近の……一年ほど前の話であつただろうか。雨毒による肺機能の低下を医者に宣告され、長くない老い先をどう過ごすか考えながらぼんやりと聴いていたラジオ

から、「雨毒に耐え得る新人類の開発に成功した」旨の発表が飛び込んできた。いやはや^{おぞ}俾ましいことをやってのけたのだと驚くと共に、自身への恩恵はまるでないことを悟り、嘆くほかすることも思い浮かばない日々を送っていた頃、男の元に、キセルを携えた見知らぬ女が訪ねてきた。闇と見紛うような黒装束に身を包んだ女は、新人類開発に携わった者であると身元を明かした後、男に耳を疑うような取引を持ちかけるのだ。

「死に至る前の今一度、その手で人を産み、育むことに関心はございません？」

提示した条件の通りに新人類の作成に臨むのであれば、諸々の技術提供を保障する。国を挙げての大規模な研究であるために、従来の倫理観に苦悩する必要はない。

知識や技術がなくなるとも、資料の記述に沿えば誰にでも作業をこなせるような段階まで取りまとめを終えている。

——決してまともな話ではなかった。何故とは言うまでもないのだが、それでも男は二つ返事で許諾した。雨毒に殺されていく時限の人生を、何か意味を持って終えたいと、そう願っていたのかも知れない。時に抗おうが従おうが、どうせ直に死ぬ。どんなことをしたところで、それを咎める者も、褒め称える者も、恐らく自分が死んだ後の世界にしか現れないことを、臆気ながら悟っていた。単に魔が差しただけだと、

そう言つて終えようと選んだ道。そのはずが、設備の投資を受け、女より承諾した条件に沿い、自身の手によって生み出した「新人類」を目前にした今になって、男は己の行いに愕然とすることとなった。確立された禁忌は想像していたよりも簡易的かつ作業的で……しかし、言葉にし難い恐怖を内包していた。

「本当に……こんなモノが……」

男の前には、全身水浸しの少年と少女が立っている。男が毎日のように様子を観察しては大切に育んできた、「新人類」と呼ばれる人造人間たちだ。二人は、未発達な体を露わにしたまま、「寒い」とか「眩しい」とか、思い思いのことを口にしていて。最初は小さな細胞に過ぎなかつたものが、培養を経て集団を成し、脈動を始め、大きな水槽の中でぶかぶかと漂うようになるのを眺めてきた。それは今まで、あくまで水に浮かんでいるだけの物体でしかなかつた。いつ見ても目や口を閉じ、身動きもほとんど取らないでいただけなのに、それが呼吸を覚えた途端に言葉を発し、目で見たものを即座に認識しているようなのだ。人の赤子とは、似て非なる存在。こんなものに何を渴望していたのかを思い出すことはできず、ランプの揺れる炎を見上げ、情けない嘆声を漏らすことしか男にはできなかつた。

「あの女——」

キセルを弄りながら微笑んでいたあの女は、もう正気ではなかったのだろう。後悔の念が渦巻く中で、それだけははっきりと思った。

「さっきからボンボンうるせーぞ、ジジイ」

少年少女は産まれたばかりの、限りなく無知な状態といえる。そんな少年からすれば、すぐ傍らで一生の回顧に耽る男は対照的な存在であり、彼が何かしらに失望しているようであることは理解できても、上向いて独り言を呟き続ける気味の悪い老人に過ぎなかった。感情のままに男へ暴言を吐き捨ててみるも、それに見合うような反応は返ってこない。少年の耳に届くか微妙な声量で、しかし確実に何かを呟いているのは分かるのだが……。男のそんな様子に対して、少年の苛立ちは次第に募っていくばかりだ。

一方の少女は、老人に対しての興味はほとんどなかった。

地下室全体を隈なく見回した後、大量の書類が乱雑に積まれた机へと気が向く。床にも生活用品などが散らかっていて、足の踏み場はほとんどない。少女にとって、ここを進むのは思いがけないほど難度の高い行為を強いられる状況であった。呼吸をしたのも初めてであれば、立ち上がることも、歩くことも同様であるためか、頭の中で思い描いているようには移動できないのだ。重心を移動させ、歩を進めた先で一時的

に留まり、再び狭い足場に爪先を持っていく——。何度もバランスを崩しては周囲の物に寄りかかったりして試行錯誤を繰り返し、ようやく机に辿り着いた頃には、どつと疲れが襲ってくるのを感じていた。それでも未だに残る好奇心を振り絞り、書類の山に紛れてこんもりと丸まる布が置かれているのを発見する。恐る恐る手に取って広げてみれば、それはどうやら衣服であるらしい。白と黒の二色の生地、冴えるような翡翠のラインが走る簡素なデザインだ。

「ねえ。こんなところに服がある」

少年に報せ、持ち得る知識から着用を試みてみると、案外すんなりと腕が通った。袖口がかなり広いためであろう。ズボン形状の服についても難なく身につけ、服の中に入り込んでしまった飴色がかった白い長髪を手繰り上げる。その動作とほぼ同時に、少女の背後……少年のいる方向から、恐ろしく大きな物音がした。反射的に振り返った少女の視界には、男の丸々とした腹へと跨り、その首をぎちぎちと絞め上げる少年の姿が映る。

「……何してるの」

少年は力一杯に爪を立て、必死に暴れて抵抗する男を押さえ込んでいるように見えた。絞首に没頭する少年へ、今一度声をかける。

「ねえ」

「あア？」

返事とも呼び難い、粗暴な声が返された。それも語気に怖みを含んでいないか。これ以上の問い掛けは面倒事になりそうだと、少女は幼いながらに察して話題を戻すことにする。男の動きも鈍り、そろそろ終わりを感ぜさせている。余程の力で絞められているのか、男の太い喉からは声にも昇華ならぬ呼気が、口内に溜まった唾液を震わす音しか聞こえてこない。

「服、あるよ。寒いし、早く着たら」

「服？」

「肘と膝までしか隠れないけど、何も無いよりちよつとマシ」

「めんどくせーな……つと」

少女の呼び掛けに億劫そうに男の腹の上に立ち上がると、念を押すようにぐいっと体重をかける。そのままジャンプをするように、短い間に数回跳ねるのを繰り返して、目を剥く男のそこかしこから肉の分離する音がすると、やつと床へと両素足を降ろした。少年が一通り満足したのを見計らって服を投げ渡す。少しいが外れてしまったが、素早く反応した少年の手に収まる。

「どうして殺したの」

確かめ方こそ知らないが、男は多分、もう死んでいるだろう。あれだけ容赦なければ、仮に生きていたとして、僅かな先もない。少女にとつて老人は別段どうでもいい存在ではあったが、どことなく楽しげにしていた少年の思考の方が気になった。少女が服を見つけるまでの時間はそれほど長くなかったはずなのに、そのうちにここまでの状況に進展した経緯を知りたいと、何となくそう思ったただけだ。しかし、少女の問いに対する少年の返答は驚くほど短絡的なのである。

「気に食わなかったんだよ。口、すげー臭エシ」

……呆れた。いろいろと聞いておきたいこともあったというのに。洋服の着方が分からないと怒り出す少年に身振り手振りで教えながらも、少女の表情は自然と引き攣っていた。これからどうしたものか。悩んでいるところ、ふと不便に感じていた事柄を思い出し、問い掛ける。

「ねえ。名前は？」

「んん？」

服の中でもがと暴れて、間の抜けた声を上げる少年。少女は追撃。

「名前を教えろって言った」

「——カラス、だ」

ようやく探り当てた襟口から顔を出し、少年が名乗る。少女の見様見真似で、腕を通すべく袖口の搜索へと続く。

「そっちは」

「キナリ」

「キナリ……言いにくいな」

いまいち舌が回らないのか、カラスが少女の名を呼びづらそうに発音した。それでもキナリは互いの呼び名を設けられたことに充足感を得、視線を再び机へと向け直す。

「カラスは、字って読める？」

「んなもん知らねーよ。お前は読めんのか」

「読めない」

「ダメじゃん」

読めないからこそ尋ねたのに、とキナリは思う。会話の意図を全く汲み取ろうとしないカラスには参ったが、逆に言えば、このやり取りのおかげで彼があまり賢くないらしいことは察することができた。無知を隠そうとせず、思ったことをそのまま口に出してくるため、案外やりやすい相手だとキナリは確信する。そんなことを内心で巡

らせつつ、机上の書類に触れ、持ち上げてカラスへと見せる。びっしりと文字が並ぶ書面を軽く一眺めしたカラスは、やはり間抜け顔を取る。

「なにそれ」

「分からない。けど、読めたら分かることなのかも」

「そりゃな……つつか、あれもこれもって分かるワケねーじゃん」

かたつたるそうに耳の穴をほじくって、カラスはとある方向を指し示す。視線を滑らせたそこにあつたのは、箱状の大きな透明の容器だった。いくつかの計器やチューブを携えたそれは、二人の腰ほどの高さの台の上に固定されている。大人が横になっても余裕があるほどのサイズで、中には黄緑色の液体が八分目まで入っており、気のせいだろうか、微かに発光しているように見える。それを視認したキナリにとつても、痛く見覚えのあるものであった。

「オレら、そこから出てきたばかりだし」

そうだ。二人はつい先ほどまでこの容器の中を浮遊していた。当時の記憶は幾分もないのだが、目を開いた瞬間の出来事は鮮烈に覚えている。肌に纏わりついてくる水の感覚。それを掻き分けるようにして触れた容器の触感。肺へと流れ込んでくる空気の冷たさ。網膜を刺激する燭火の眩さ。そしてそれら全てを表現するために必要な言

語が滾々と湧き続けてきて、頭が急に熱く、重くなったような気がした。鼻も口も水の外に出たというのに、一向に息苦しさは解消されず、もがくようにして体を乗り出したところへ飛んできたのが、この部屋で息絶えている初老の男だった。

……意識が覚醒してから今までの記憶といえば、大体そんなところか。そう思い返して気がついたが、当時感じていた頭重や息の詰まるような感覚は全くなくなっていた。

「わたしもカラスも、自分の名前は知ってるし、紙とか、服とか、目にすればそれが何なのかほとんど分かるのに、どっちも字は読めないんだ……」

「字だけじゃないんじゃないの？ 分かんないモンは、何を見たって分かんないぞ」
今更になって、ようやく衣服を着用し終えたカラスが言う。

「俺らが入ったこの水槽みたいなモンだって、名前も意味も知らねーし。そこでくたばってるジジイのことも、だな」

言われてみて初めて「そういうものだな」と自覚することを、二人は生まれてから間もない短時間で幾度も経験していた。何とも形容しがたい感覚だが、言葉にできないのなら仕方がないと諦めることは意外と容易かった。尤も、キナリは老人にその辺りのことを問い詰めようと考えていたのだが……今となっては叶えようもない夢と

散ってしまった。手に持っていた書類を机の上に戻したキナリは、赤味の強い黒髪が目にかかるのをうざったそうにいじるカラスを見、提案する。

「外に出よう」

「外？」

「これを読める人を探すの」

床を占領する障害物を避けながら、出入口であるドアへと向かう。先ほどよりも遙かに楽に歩行できる。経験や慣れというのはこういうことか、とキナリは思う。面倒臭そうに後ろをついてくるカラスの気配を感じながら、ドアの前で立ち止まり、両手で押してみる……が、動かない。何度か同じようにしてみたと、取っ手の存在に気づき、手前に引き寄せることでドアは開いた。先には階段が見える。地下室の外も同程度の明るさで、探索するのに支障はなさそうだ。

「あんなペラッペラの紙なんて放っておいたっていいだろ」

カラスの不満が届く。

「駄目。これからどうするべきか分からないし」

「別にどんなことしたっていいじゃんか」

「それじゃ、わたしたちのこと、ちっとも分からないままになる……気がする」

「勘かよ」

「……勘でも、何もなによりマシ」

カラスの無鉄砲な意見には腹が立ったが、自分の勘がそれに対抗できるほどの自信もない。仄暗い視界に目を凝らしながら階段を上り切るも、カラスを正當に論破できないもやもやした感覚が、キナリは無性に悔しくて仕方なかった。些細な失敗を引き摺り始めたキナリをよそに、カラスの興味の矛先は二転三転と変わっていくようで、地下室と同型のランプに照らし出される部屋の内景それぞれを眺める。

「そういや、なんでジジイを殺したのかって、さっき訊いてきたよな」

「……うん」

ランプの揺らめく炎をじつと見つめたまま、カラスが改まる。キナリも歩みを止め、振り返る。

「理由はホントになかった。口が臭かったのは嘘じゃないけど、気に入らないから、邪魔だったから、首を絞めれば殺せると思ってやってみただけだ」

「……………」

「なんか悪いことだったのか？」

少年は少女を向き直る。炎の橙が、波紋のように二人を照らす。カラスの屈託のな

い視線に射抜かれて、キナリは慌てて俯いてしまう。何か後ろめたい気持ちがあるわけでもないのだが、彼と同じように、相手をじつと凝視するなんてことはできる気がしなかった。

「わ、悪いって言うか……」問いには答えねばと言葉を繋ぐ。「逆に、襲い掛かられたら危ないって考えはなかったの？」

「危ないなんてことねーだろ」

「だって」と、カラスは続ける。

「オレらってさ、ちよつとやそつとじゃ死なないんだろ？」

キナリは目を白黒させた。カラスが当然のように放った言葉の意味が理解できなかったのだ。

「——どういうこと？」

これまで彼の考え方が分からなかったことは多々あったが、言っていることが噛み砕けなかった覚えはない。死なないというのはどういうことなのだろうか？ キナリの知り得る情報だけでは処理できない事柄であることは瞬時に判別できた。再度聞き直した上で、詳細を一つずつ教わることが最も手早いと考え、疑問符を口にする。恐らくいくつか小言を挟まれるだろうが、今は懸念よりも知識欲が遙かに勝っている。

どうとでも言えと諦めたキナリの予想したように、カラスが憎たらしい笑みを浮かべる。しかしそれはほんの一瞬のことで、すぐに眉をしかめ、見たこともないような眼光を宿らせた。

「キナリ、後ろ見てみる」

そう促したのは、実に小さな声だった。

「窓のとこ。何かいるぞ」

カラスの示した通り、背後を確認する。建物の外へと通じているはずの玄関ドアを挟むように、左右に一つずつ窓が設けられている。その右側……キナリとカラスのいる場所から遠い側の窓枠に、人影が凭れかかっているように見受けられる。カラスは崩れてしまっているらしく、その人物を隔てるものは何もない。いつからそこにいたのか分からないが、少年少女が警戒しながら睨みつけようとも、身動き一つ取らず、その場にじっと佇んでいる。外は月明かり以外まともな光がないため、顔はほとんど識別できないが、真っ白な毛髪と、同じように白い肌だけは確認できる。背丈は二人よりもかなり高く、体格はキナリをそのまま大きくしたような痩身だ。

「おい！」

先に行動を起こしたのはカラスだった。その場で居直ると、人影に向けて大声を上

げたのだ。まさかこの状況でいきなり呼び掛けるとは思ってもみず、キナリの方が機敏に振り返るが、もはや彼の意識は正体の知れぬ人間一点のみに集中してしまっていて、キナリの物言いたげな表情など目端にもくれない。

「デメエ、誰だよ？ 黙って見てねーで答えろ」

刺すように白い月光を背負い込んだまま、人影は物音一つ立てる様子はない。視線を逸らすことすらもせず、カラスの声は丸つきり遮断されているかのような無反応の加減である。さすがのカラスも得体の知れない気味悪さを感じ取っているのか、老人を絞め殺したときのような無鉄砲な行動に出るつもりはないらしい。広い部屋の対角から一步も踏み出せそうにない緊張を肌を感じ、キナリの心臓は破裂しそうなほど脈動を速める。息をするのもやつとで、意識しないうち、カラスの袖口を抓るつかるようにして縫る。

『——確かに君ら“新人類”は、致命傷に成り得る外傷、内傷共に対して耐えられるよう、やたらと頑丈に造られている』

ふと、聞き慣れない低い声が木霊した。ざりざりとした質の悪い音だ。ようやく返って来た言葉に身構えるカラスの横、驚いたキナリは腰を抜かして座り込んでしまう。物音に気づいたカラスに「何してんだ、早く立て」と鼓舞されるも、体はすでに言う

ことを利かずどうしても叶わない。視線を対象から外さないようにするだけで手一杯だ。身動きが取れそうにないキナリを見、舌を打つカラスの焦燥を煽るように謎多き人影がゆらりと動いたと思うと、ガラスのない窓から細長い腕を通し、ひよいと部屋の中へと跳び込む。着地音はほとんどしない。丸まった背をゆつくりと持ち上げると、ランプの明かりを受け、ようやくその全身像を浮かべた。

すらりと伸びた肢体は細く、且つ長く見える。痩せ型であるためにそう捉えてしまふのだろうか。膨らみのある胸部の隣、唯一露出している腕には薄っすらと影が落ちており、多少の筋肉の隆起を感じさせる。そのほかの素肌は黒い革素材の衣服に包み隠されているが、顔や手足首から僅かに覗ける部分から察するに、カラスやキナリよりも一層白く、血管や内臓すら浮いて出てきそうなほどだ。肌と同様に白い髪は、左側面は几帳面に結った後に編み込まれ、打って変わった右側面はほとんど何も手を加えずに垂らしたアンバランスな形。そのやや長い前髪の下に埋まる瞳は澄んだ青色をしているのだが、生気のない目つきの子のせいで活力は皆無に等しく、表情も彫像と見紛う。少し骨張った右手には黒っぽい刃物を、細い腰には手のひら大の箱のようなものをそれぞれ携え、踵の高いサンダルを不格好に鳴らしながら少年少女との距離をじりじり詰める。

『少年。君の方はそれを知識として備えているようだが、擬似的にでも不死身を望むのなら、残念ながらいくつか条件を満たさなきゃならない』

目の前の人物が女であることくらいはカラスにも判別できたが、この声が思考の邪魔をする。女の腰に括りつけられた箱——スピーカー類と思われる機器から音が出てくるものの、これがどういう仕組みであるのか、そもそも女自身の言葉を語っているのか、はたまた全く関係のない第三者のものなのか……そういった細かな部分が合点いかない。今一度キナリへ視線を向けるも、彼女もカラスと同じような戸惑いを目に浮かべていた。

『おいちゃんたちね、君らを保護するためにここまで駆けつけてきたわけよ。それ以上難しいことは言わないし、逆に二人が詳しいことを知りたいって言うんなら、後ほどじっくりと質疑応答タイムを設けようとも思ってる』

でも、と冗長な言葉は続く。

『そっちに着くまでもうちよい時間かかるから、そのまま大人しく待つてもらえると非常に助かるんだよね？ や、これホント頼みたいんだよなあ』

やや早口にそこまで言い終えると、息を切らしながら、機械は調子を明らかに苦笑いを含んだ。ドタバタと大仰な足音も混ざって聞こえてくるという事は、声の主は

どうやら走ってこの場所へ向かっているらしい。つまり、女のほかに違う人間がもう一人いて、何かしらの関与をしようとしていることになる。足りない頭で考え巡らせるうち、女の歩みが二人のすぐ手前で止まった。

「……ぐだぐだワケ分かんねーこと言ってるよ」

青い瞳が無感情に二人を見下す。いよいよ悠長にしていられない状況だ。とにかくもう一人の方が来る前にここを切り抜けるべきだと、カラスの勘が警鐘を鳴らす。カラスの声色から悪い予感を察したのか、機械から切羽詰まった声が飛んでくるが、もう遅い。

『ちよつと待って！ あと二分で着くから——』

「待ってられっかッ！」

さっき老人に対してやった手順と同じでいい。首を絞めれば息は止まる。相手もがき苦しんで抵抗してくるのを押さえ続ければいいだけ。そうすれば簡単に殺せることは覚えた。決心の直後、キツと女を睨みつけたカラスの腕は白い首元へと伸び、瞬時に目標を手中に収める。そのまま渾身の体当たりを食らわすと、女は容易く床へと転げたため馬乗りになる。

あとは好きなように喉笛を掻き切ってやるだけだ。込み上げてくる高揚感に顔が歪

むのを自覚しつつ、女の表情を拝むべく目を向ける……が、先ほどと一つも変わらぬ女の端正な顔が、カラスの眼前にあった。喉元へ容赦なく爪を立てられているというのに、痛がるわけでもなければ、抵抗をする様子もなく、青い瞳がじつとカラスの目を見据え続けている。

「なんだ、こいつ……」

カラスの親指の爪には、間違いなく女から剥ぎ取った少量の肉が詰まり、赤い血を滲ませていた。それなのに、いくら力を込めようとも女が動じることはないのだ。あまりの反応のなさに背筋が凍る。

『あちゃー。手え出しちゃったよ……』

今までよりもさらに低調の聲が機械から聞こえたと思った瞬間、女の左手がカラスの顔面を覆うように伸ばされる。

「カラス——……!」

この時、キナリにはどういいうわけか女が直後に取るであろう行動がはつきりと予感できた。総毛立つのを感じ、慌ててカラスの名を呼び掛けるのだが、すでに制止できる状況ではない。意表を突かれて緩んだカラスの両手が首から外れると、女は展転し、咄嗟の間に少年を押さえ込む。カラスもそれを振り払おうと力を込めるも、女の四肢

はびくとも動かない。虚弱ふんまんそうな外見からは想像もつかない力量だ。なすこと全てを妨げられてしまうことに憤懣ふんまんとするカラスへ、女の右腕がふつと振り上げられた。手に握られたナイフが凶暴に輝く。女を止めようとキナリも這いつくばって近寄ろうとするが、全く間に合わず、狐疑こぎない一撃がカラスを襲った。

女の操るナイフはカラスの喉頸のどくみを貫き、多量の鮮血を噴かせたと思えば、すぐに引き抜いた刃を再度煌めかせ、少年の顔へと追撃を見舞う。キナリは、度々に全身を引き攣らせるカラスと、やはり表情一つ変えない女の様子をただ傍観することしかできない。飛散したカラスの血液の臭いは、舞い上がった埃と混じって強烈な刺激を運んでくる。きつとこれは悪い夢だろうと、根拠のない願いに耽るキナリの想いも届かず、気が済んだように女が立ち上がった頃には、カラスは真つ赤に濡れて気を失い、首筋と頬に開いた傷口からただ血を垂れ流していた。

動かなくなったカラスを見下ろしていた女が、思い出したようにキナリのことを見返る。白い首には深い引つ掻き傷が痛々しく残っているが、それを感じさせぬ鉄仮面のような無表情が少女を迎える。ほんの数歩だけ歩いてしゃがみ込むと、返り血まみれの女の顔がキナリの視界を全て支配した。もはや生きた心地などしないが、やはり躊躇いもなくナイフを持ち上げる女へ、キナリは震える声を振り絞る。

「い——言うことは、聞く」

女の氷のような瞳は揺るがない。

「抵抗も、しないから……」

命乞い。これが情けないとか、みつともないとか、そんな感情はない。キナリもカラスも、人生を始めたばかりだからだ。しかし運の尽きだけはすでに痛切に感じていゝる。女には言葉も感情も伝わっていない様子だし、戦慄のせいで手も足も石のように重く動かせない。そんな丸腰の少女のどこへ身を埋めようか、ナイフの刃先が行き先を決めるように少しの間だけ振れた後、キナリの左胸へと向けられる。自身の胸部を一旦見、再び女へと視線を戻したと同時に、左胸に冷たい激痛が走った。視認する必要もない。ナイフの大柄な刃の半分以上がキナリの中へと入り込んでいた。ほとんど声にならない悲鳴を漏らし、見開いた双眸で女を見る。血の通っていないような冷酷な表情だ。刃が引き抜かれ、胸の傷を押さえて蹲るまでの短い時間だったが、キナリには女のことが慈悲のない人間にしか映らなかつた。震える息が、傷を塞ぐ自分の手に当たる。湿り気を帯びた空気に濃い血臭が漂い、止めどなく流れる体液の温かさを実感すると、次いで嗚咽が溢れ出てきた。

これ以上、まだ何か起こるのだろうか。状況整理の追いつかない脳が逞しくも次の

危機を想像していると、聞き覚えのある低い声がキナリの耳へと届いた。

「ほらア、言わんこっちゃない……!!」

女の所持していた機械から聞こえていた声だ。耳障りだったざりざりした音はしない。ゆっくりと顔を上げてみると、女よりも一回り以上大きな体をした男が、ドアを開け、部屋の中へと入ってきていた。どうやらこの男が先程の声の主で間違いないらしい。肩で息をしながらゴミ溜めのような部屋を掻き分け、次の的を見定め始めていた女を背後から羽交い絞めにした。脊髄反射的に暴れ始めた女へ声を荒げる。

「アカアリ、やめっ……ストップ、ストップ! はーい、もう終わり!」

「……」

額から汗を流す男をゆっくりと振り返った女は、何かしらを思考したのか、間を空けてからもう一度両腕にぐっと力を込める。しかし、なかなか外れそうにないのを察して諦めたのか、右手のナイフを床にぼとりと落として項垂れてしまった。なおも瞳はキナリのことを眺めているものの、一段落したとみて良いだろう。男の方も大きく深呼吸をつき、ようやくキナリへと視線を向けた。

「悪いね、こいつ聞かん坊でさ」

薄っすら髭の生えた顎で女の脳天をぐりぐりと押す。見るからに不快そうな行為だ

が、やはり女は死んだように同じ顔のままである。男が襲い掛かってくる気配はない。それだけを確認すると、キナリは小さく呻き、蹲り直す。出血は止まらず、床に溜まり始めていた。

男は女を解放し、カラスとキナリを順々に眺める。

「いやはや……いつものことながら凄惨だな」

言って、男は放置されていたナイフを拾い上げ、あぐらを掻いて座る女へと手渡す。それから気絶したカラスに近寄って上半身を起こしてやると、幅広の肩に少年の細い腕を回して担ぎ上げた。その動作の中、ちらりと見えたカラスの顔面は血で赤く濡れており、目、頬、首、肩の広範囲に大小様々な刺し傷が見受けられる。

「五分くらい歩いた先に車を用意してある。この街は整備されなくなって久しいせいで、道が悪くて近くまで乗り合わせられなくてね。少年は俺が持つてくとして、嬢ちゃんの方は歩くくらいできそうかな？」

男の声が自分へと投げられているのを感じ、徐々にだるさが増していく中、目だけを男へ向けるキナリに、意地悪な笑みを浮かべる。

「怖がっちゃって、可哀想に」

同情、なのだろうか。それにしても少しばかり冷めているようにも聞こえるが……

痛みと失血で意識も朧な今のキナリには、僅かなニュアンスの違いを見抜くほどの判断力はなかった。男の方も端から分かった上での発言らしく、何事もないように自己紹介を簡潔に済ませる。

「俺がムロビシで、こっちの女がアカアリだ。さつきも話した通り、俺たちは君らを保護するために廃街まで赴いてきたってわけ。大人しくついてきてもらえるかな？ ……とまあ、こんな雑な説明じゃ納得は行かないだろうし、その怪我を放って立ち話しても良いことはないやね。さつきと移動しよう。それに——」

アカアリと呼ばれた女が、キナリの襟を引き上げ、強引に立ち上がらせる。ふらつきながらも倒れず体勢を維持したキナリへ、ムロビシはまた、意地が悪そうに笑って言った。

「そんなにアカアリが怖いんじゃない、ここでノーとは言えないもんね？」

* * *

——混濁した世界が延々と続いている。目の前は全て黒く塗り潰されていて、身動きも取れないほど、重たい泥のように纏わりついてくる。その感覚に逆らうこともせ

ず、一体どれほどの時間、体を預けていたのだろうか。恐らく分秒の単位ではない。相当に長い時間、思考を停止させて天を仰いでいたような気がする。もしかしたら、このままずっと変わらないで終わるのかも知れないときえ思うほどに。

ところが、脳に走ったチクリとした痛みと共に、目覚めの時は突然訪れる。沈殿していた暗闇は一瞬の明滅を経て鮮血のような真赤の世界へと姿を変えた。呆けている場合ではないと喉けしかけられているようだ。遠くに聴こえていた鼓動が次第に大きく感じられるようになると、取り取りとどの感覚を認識し始める。

ゆっくりと瞼を開ける。長らく振りの動作だ。視界は赤の世界から脱し、転じて淡い緑一色に包まれる。少し眼球を動かしてみても、周囲に何かがあるわけでもなく、色以外の情報は得られない。焦点も合わず、全てが朧気にしか捉えられない状態である。寸刻そうしているうち、脱力しきった体が浮遊していることに気づく。

(浮いてる……)

以前も経験したことのある感覚だった。あの時も、こうして淡い光に刺激されていくうち、何か大変なことを思い出したような――。ぼんやりとした意識のまま記憶を手繰り寄せていると、口からごぼりと音を立てて息が漏れた。目の前を、呼気が泡状になって遠ざかって行く。歪んだ円形の数々が不規則な軌道を描いて姿を消す頃、ま

た、針で刺されたような痛みに襲われ、ハッとする。

(泡——…?!)

焦燥した。いつまで経ってもぼやけたままの視界。重力を忘れて揺蕩たゆたう体。視認できず呼吸。それはつまり、自身が水の中にいるということではないか。果たしていくら持ち合わせているかも分からない本能によって、このままでは溺れ死んでしまうことを肢体の端々にまで伝達されると、大量の泡を口から吐き出しながら手足をばたつかせる。全身を包む液体は生温く、多少の粘度を持つているようだ。どちらが上で下なのかも判別がつかないまま大暴れした末、右手の中指が何かに触れた。慌ててそこからへ体を寄せて腕を伸ばすと、ちょうど指が引つ掛かかりそうな部分を探り当てる。指先に力を込めて体を引き上げると共に、カラスの頭部はようやく水面を破った。

長い、黒い前髪が、濡れた顔に貼りついて視界を狭めている。空気を吸い込む前に、口からは大量の水が垂れ落ちる。知らぬ間に飲み込んでいたのだろうか。間髪入れず咳き込み始めたものの、それも数回ほどで落ち着きを取り戻す。

「あ、あれ……?」

音を立てて水を吐き戻したが、元来、この程度で解決するものなのだろうか？ 無意識に防御反応を示した体も、水に対する知識を持っていた脳も、難なく呼吸を行え

るようになっていいる自身の状況が理解できない……そんな違和感。

気づけば足を着いて立姿を取っていた。誤飲した液体が体内に後切れ悪く残っている気がして、空咳をしながら眼下の水面を見下ろしてみれば、見覚えのある黄緑色の液体が揺れる。着たままの衣服や自身の脚が見て取れるほど透明度は高い。厚みのある硝子のようなものでできた容器の中、カラスの胸の辺りまであるだろうか、僅かに自光する不思議なそれを掌に掬すくって眺める。

(ジジイの部屋にあったのと、おんなじヤツっぽいな)

手を傾け母体へ流し戻す。ただの水よりも少しばかり粘り気を帯びていて、肌から離れるのに水とは異なる感覚だ。そういえば初めてこの液体から這い出したときも、体に纏わりついてきたせいで余計に床を濡らした記憶があるが、それもいつの間にか乾いていたなあと、上向いて思い返す。以前は見られなかった、液体の中を行き来する帯状の光を気にしつつ、視界の邪魔をする前髪を頭頂部まで搔き上げ、容器から出ようと縁へと目を向けると。

「おわッ!？」

白い髪の間人がいた。雪みたいに白い肌に埋まる、眠たそうな青い双眸がカラスのことをじっと見つめている、それは——総毛立つほど恐ろしい記憶の根源である女だ

った。少年にとつての初めての恐怖体験を仕掛けてきた張本人は、容器の縁にへばりつくように待機し、何をするわけでもなく、トラウマに青褪める獲物をひたすら観察しているよう。カラスが捉えた女の様子は、ひとまずそれが最後だった。反射的に驚嘆の声を上げ、後退。しかしあまりに急いたために足を滑らせると、再び全身は液体の中へと逆戻り。勢いは死に切らず、容器の反対側面へ後頭部を強打してしまう。それなりの痛みはあったが、今はそんな小さなことに構っていられるような心境ではない。すぐさま立ち上がり、髪を退かし、女との距離を最大限広げられる場所へと後退する。

「お、お前っ！ あん時のバカ強え女——！」

相方の少女と共に薄暗い地下室を出、さらなる自由を求めて外へと繋がる場所を探していたところへ突如現れた悪魔のような存在。瞬きをする余裕もないまま圧倒されたことだけは覚えている。細長い四肢で覆いかぶさるようにして、真っ直ぐに見下ろしてくる青い目には、自身が老人を絞殺する瞬間に湧き上がってきたような高揚感も、相方の少女の目に絶えず浮かんでいたような不安感も、何もなかった。今と変わらぬ無感情のまま、ただ作業的にナイフを振るい、何度も、何度も、カラスの顔や首を傷つけ続けた。当時の形容し難い痛みを思い出すだけで背筋が凍る。女は、強張るカラ

スから目を逸らすことなく、だからと言って襲い掛かってくるような素振りも見せず、不可解な姿勢を保って静寂している。

全く反応を示さない女と、容器に背をつけ対峙するカラス。今度はその首元へ、ひんやりとした何かが触れると同時に、聞き慣れた声が鳴った。

「——やっぱり、塞がってる」

囁くように届いてきた声は、カラスの右耳元から発せられたようだった。立て続けに予想外な出来事に襲われるために、情けない悲鳴を上げ、大仰に驚き振り返ると、キナリの顔が眼前にあった。中途半端に伸ばしていた右手を体に引き戻し、彼女は至極平凡な挨拶を投げてきた。

「おはよう」

僅かに茶色みがかった白髪を後頭部で結んでいる。確か腰ほどまでであったはずだが……片目を隠していた前髪も一緒に結っているため、かなり印象が変わって見える。カラスと同様、服を身に纏い、隣同士——アカアリとは反対側、カラスの背後に設置された別の容器の中、やはり黄緑色をした怪しげな液体に浸かっていた。

先ほどカラスの首に触れたのは、どうやらキナリの指だったようだ。安堵して息をつくが、この調子では全く気が休まりそうにない。特に、あの不気味な女がいるせい

で……。

「びっくりさせんなよ、アホ」

「アカアリにやられた傷、塞がってるかどうか確認したかっただけ」

「ああ、そう言われてみれば……」

指摘された傷口に触れる。顔に三箇所、首に二箇所。それぞれの傷を、柔らかな肉が凹んだ状態で塞いでいる。意識してみるとまだ痛んでいるのが分かるが、完治とは言えずも、かなり良くなっているようだ。

「で？ アカアリってのは、その女の子か」

「そう。カラスを返り討ちにした人」

「うっせえ。そんなやつがいる前で、オレらは何でノンキに風呂になんか入ってんだ？」

「それは——」

キナリの表情が曇ったと思った瞬間、アカアリの方向から別の声が飛んで来る。

「それは、おいちゃんからご説明いたしましょう」

これも聞いたことがあった。容器にぶら下がるようにして居座るアカアリの背中側、十数歩ほど離れた位置にあるドアから、体格の良い中年の男が姿を現した。清潔感に

欠ける無精髭を蓄え、似たように不潔そうなボサボサの髪を一つに結んでいる。両手には板のようなものを大事そうに抱えており、その上にはいくつか物が乗っているのを確認できる。

「おっさん、あん時のややこしいこと言ってたヤツだろ」

「はは、ご名答！」

すぐさま思い出したらしいカラスに対し、調子良さそうに話す男。

「アカアリに持たせてた通信機越しにね。まあ、それもアカアリとカラスくんが喧嘩してるうち壊れちゃったんだけど」

言葉を交わしながら三人が密集する容器へ近づき、傍にあった何かしらの機器の上に荷物を置く。トレイに乗せられていたのは、どうやら人数分の飲み物と食べ物のようだ。具の少ないスープとパンのほか、卵焼きのようなものがあるが、これだけは目に見えて少量だ。

「さっ！ 聞きたいことは山ほどあるんだろう？ 飯でも食いながら親睦を深めようじゃないの」

カラスとキナリは互いに見合う。キョトンとした様子の二人へ、木箱に腰掛けた男はすぐに提言する。

「そこから出ておいで。足、滑らせないようにね。タオルもあるから、ちゃんと水気拭きなよ。この部屋、暖房入らないんだ」

「……」

「大丈夫だつて。おいちゃんは君らみたいながキンちよを取つて食うほど見境なくはないし、そこにぶら下がつてるアカアリも、刺激しなきゃ昨日みたいに暴走することはないよ」

まるで二人の思慮を見透かすかのように、男は次々と言葉を口にしていく。その催促に先に応えたのはキナリだった。容器の縁によじ登り、一旦腰掛けてから外へと出る。着地の際に少しよろめくが、倒れることなく体勢を整えると、容器に繋がる管材にかけられたタオルを手に取り広げ、肩周りを包むようにして巻きつける。一連の所作を終えると、警戒心あらわに口をへの字に曲げるカラスを振り返った。

「どうせわたしたちだけじゃ何もできないと思う。だったら話ぐらいは聞いておくべきじゃないかな。それに……」

にんまりして二人を眺める男と、その隣に置かれたトレイに目を配り、再度カラスへと視線を戻す。

「おなか……空いた」

キナリのその一言を聞いた男が盛大に吹き出し、笑う。

「こりゃいいや！ ほら、女の子がこんなに勇氣出してんだ。いつまでもじっとしないで降りてきたらどうだい。そりゃ俺ぐらいの歳にもなりや、君らみたいな子供を言い包めるのは朝飯前だけだね。そのタイミングは今じゃなくなつていくらでもある。さて……他にどう言えば、そのビビりは収まるのかな？」

男のそれは、あまりにも分かりやす過ぎる売り言葉だが、カラスを誘うには十分だったらしい。どの目にも明確に映るほど、カラスの顔には怒りの感情が沸いた。凶星だったのかな、とキナリは静かに鼻を鳴らす。

「分あつたよ、そつちに行きゃいいんだろ、クソツ！」

別にこんな女のこと怖いわけじゃないからな、とか、オレから聞きたいことなんて一個もねーけど、とか……誰も問いかけもしていないことをぶつぶつ呟きながら、キナリと同じような経路を通つて、男の真ん前、床にどかつと座り込む。その後を追つて床に飛び降りたアカアリも、猫背を晒してヒールを鳴らし、カラスのすぐ左隣に腰をおろし、あぐらを掻いた。案の定肩を震わせるカラスのことを、穴が空くほど見つめる。

「うん。俺としても、それが一番賢明な判断だと思ふね」

満足いったのか、男はわざとらしく何度も頷いてみせた。

「キナリちゃんには改めての紹介になるけど、俺がムロビシで、カラスくんの隣にいるのがアカアリだ。面識があることは覚えてるね？」

「イヤってほどにな。そもそもお前ら何者なんだよ」

「いい質問だねえ！」

愉快そうに言いながら、ムロビシはカラスとキナリヘティーカップを差し出す。警戒して受け取ろうとしない二人へ、「ただの紅茶だ」と自分の分へ口をつけて見せる。二人は目を合わせるが、キナリの不安げな様子を察して、今度はカラスが先導してそれを受け取った。湯気が立つほど温かく、心地の良い香りが漂う。真似するようにムロビシからカップを手取るキナリを見、少しだけ口に含んでみる。特別味があるようには感じられないが、香りが口から鼻に抜けていくのは新鮮な経験だ。目新しさに挙動のぎこちないカラスを眺めるムロビシは、ぐいっと大きく紅茶を飲み込み、カップをトレイに戻して話し始める。

「俺たちは君らのような身寄りのない『新人類』と呼ばれる括りの人間の保護にあたってている。保護するのは『新人類』の皆々様方にここまで同行してもらおう代わりに、こういった食事であったり、一般的な教養であったり、様々な世話を引き受けるよう

なもんだな。よって、俺は君らに危害を加えたいってワケじゃあない。まずここだけは明確にさせておこう。……残念ながら、アカアリは別なんだが」

「……別？」

二口目の紅茶を飲み込んでから隣のアカアリをちらりと見るが、やはり瞬きもせずカラスを眺めている。今にも襲い掛かってくるのではないかと思うと冷や汗が止まらない。そんなカラスの心情を知ってか知らずか、睨み合う二人を横目に、キナリも床に座り込み、ようやく紅茶に挑む。恐る恐るカップを傾けるのだが、唇に触れた紅茶の温度に驚いたのか、びくつと肩を震わせてしまう。それを見逃さなかったムロビシの視線を感じる。いい気分はしないとむくれながら、黙って同じ動作を取る。

「お気づきの通り、アカアリには言葉や感情つちゅーようなもんがほとんど通用しない。身振り手振りで多少のコミュニケーションは取れるけど、ちよつとでも気に食わないことがあるととにかく暴れ回るもんだから、二人とも、また痛い目に遭いたくないりや気をつけた方がいい。聞き分けが悪い癖に、腕っ節だけはやたら強いのも困ったもんだ」

二人とも、ということとは？ ムロビシの言葉が引つ掛かりキナリを向くと、少女は清まして小首を傾けた後、肩に掛けていたタオルをひらりと持ち上げる。隠すように

していた服の左胸部分には切れ目が入っており、そこから緋に変色した肌が見える。

「……一緒。アカアリに」

ぼそつと呟く。カラスにそれだけ伝えると、タオルを元のように戻して縮こまり、カップを両手で包むように持つ。視線は誰もいない部屋の隅へと向けている。一連の行動に彼女なりの思考が表れているはずなのだが、そんな情緒的な勘など働くはずもないカラスは、見てくれに表情を引き攣らせた。

「うっわ……。ヤな色してんな」

「いやいや。他人事みたいに言ってるけど、カラスくんの傷も全く同じだからね？」

「はあ!? まじかよ」

いてて、と呟いて足を組むムロビシから、無神経なカラスへちやちやが入る。一人で騒がしくしている少年と、もはや自分の話は終わったものだというように沈黙する少女の顕著なまでの反応の違いを楽しむムロビシは、続いて平たい皿をそれぞれ配る。そこに揺れているのは、黄色っぽい、ほのかに甘い香りのするスープ。コーンスープという名称であるらしい。ごつごつした男の手から皿を受け取ったカラスは、左頬の傷を気にして再度撫でてみる。だが、目に見えない位置にあっては確認できようがないことに気づくと、諦めて食事に専念することに決めた。

次いで手渡されたスプーンという器具でスープをすくい上げて、ごくろり。とろっとした舌触りと共に、甘みと、僅かな塩味が口や鼻に広がる。さきほどの紅茶よりも好みだ。気に入り、二口目も掻き込んだとき、左隣に座ったままのアカアリの存在を思い出す。彼女の手は空のまま。どうやら食事を用意されていないらしい。

「なあ、おっさん。こいつの分はないのか？」

カラスの問いに、ムロビシはスプーンを銜えながら唸る。

「アカアリは食が細いつていうか、あんまり興味がないつていうか……」

おもむろにトレイの上のパンを掴むと、アカアリに見える位置で左右にゆっくり振ってみる。彼女の視線はそちらへ移ったものの……一瞥した後、すぐカラスへと興味が戻ってしまう。「いつつもこんな感じ」と肩を竦めるムロビシと、「オレのことは放っておいてくれて良い」と苦い顔のカラス。なんとなく波長の合ってきた男二人へ、スープに手をつけずにいたキナリが語気を強めて言葉を挟む。

「ムロビシは、わたしたちの何を知ってるの？」

はつきりとした物言いだった。今までと少し様子が違うのを、カラスは怪訝そうに見ながら食事を進める。問いかけられたムロビシも一瞬驚いたように目をぱちくりさせたが、すぐに調子を戻して応じた。

「あー……。順を追って話そうか」

アカアリの機嫌を取り損ねたパンを齧る。二人もいつでも食べていいよと言うように、空いた手で残りのパンを指差し示した。

「この国——ネヴェリ才連併国れんべいが所有する巨大兵器〈ヨサメ〉が、三年前に暴発したのが事の発端になるね。どれだけの大きさなのは、あとで外に出てみれば分かると思う。とにかくでかいヨサメは、元々建造されてから何十年も放置されてきた謎の多い兵器だったんだが、それがある日突然、地鳴りを上げて黒い煙みたいなものを放出したんだ。空に向かって、大量にね。煙は雲に混ざって何日か漂ったあと、全く同じような色をした雨を降らせた。不気味な色以外には何ら変わった点もない、普通の雨だったと思うね。ところが、数日降り続く内、雨に直接当たった人間や動物が大勢死んだり、直撃を免れた連中も生殖機能が低下したり、とにかく散々な症状に悩まされることになってなあ」

「……もうちよい簡単に説明しろよ。言ってること全然分からねえって」

瞬きも少なに聞き入るキナリとは対照的なカラスが、懐かしげに語るムロビシへいちやもんを入れる。その手にはしつかりパンが握られていて、すでに何度か噛み切った形跡がある。すでに飽きたかのような様子だ。そんなカラスの隣、さらに不満げな

目で彼を睨むキナリに気を向けつつ、ムロビシは説明を改める。

「まあ、得体の知れない雨が降ってきて、子供を作れない体になっちゃったって感じでオツケーだよ。これが国土全域と隣国の一部にまで降ったこともあって、たかだか数日の間に人口急減、一気にろくでもない生活をしていく羽目になっちゃったのね。欲を言えば、その数日だけで終わってくれりゃ良かったんだけど……」

「まだ降ってるってか」

「そゆこと。さすがに毎日降り続けているってわけじゃないが、ごく普通に、雨雲から雨が降る自然のメカニズムに完璧に組み込まれてる感じだねえ。雲が晴れることもなくはないけど、年に数える程度かな。太陽の光が拝めなくなっただけで気温は思いつ切り下がったし、雨とは関係のない心身の不調を訴える人も後を絶たない」

最後の一切れになったパンをスープに浸し、ぱくりと食べる。

「あらゆる面で不便な中でも一番困ったのが、俺らが今食べているような飯の確保だったね。パンで例えるなら、麦を育てる農家、粉を挽く業者、生地を練って焼くベーカリー……みんながみんな、忽然といなくなったようなもんだ。特に卵であったり牛乳であったりいう生鮮食品は、家畜自体が野晒しに育てられなくなっただけで、なかなかありつくこともできない状態が今も続いている。さすがにこのままじゃいけない」

てことになって、すぐさま世界規模で計画されたのが、君ら“新人類”の開発だ。つまり、君たちはものすごく頭のいい人間によってつくられた、人間に代わる新しい人工生命ってとこだらうね。この辺の話、二人にも思い当たる節があるんじゃない？」
投げかけに、キナリがハツとする。

「……あのおじいさん」

「当たり前！」

どことなく楽しそうにするムロビシ。綺麗に三等分した卵焼きの一つを頬張り、彼の食事は一段落したようだ。カラスもムロビシがスプーンで切り分けた卵焼きのうち一切れを食す。……会話には相変わらず関心もなさ気である。

「じいさんが大元の誰かしらに依頼されて、二人の生育に携わったってことだ。君らをここに連れてきた後、あの家にもう一度出向いて持ち帰ってきた書類にも記載されてたから間違いないだらうね。君ら“新人類”には、俺らと根本的に異なる性質がいくつもある。一つ目は『致命傷に耐え得る身体構造』であること。これは雨に対抗するためでもあり、そのほかのアクシデントで簡単に死んじまうことを回避するためだ。二つ目は『データ・プール星霜匣』による細胞修復。これが廃街でちよろつと話した、特定の条件ってやつになる。星霜匣ってのは、ついさっきまで二人が浸かった、あの容器と

液体のことだね。俺も詳しい仕組みは分からないまま本部に支給されてるけど、〃新人類〃の中でも、君らのような（廻人）に分類される子たちの身体維持に必要な溶液なんだとき。アカアリにやられた傷が塞がったのは星霜匣のおかげであって、放置してたら治るものも治らないという意味では不死身とは言い難い。現に今回も塞がるまでに丸一日かかったしね。あんまり驕らないようにした方が身のためだつてのは是非とも覚えておこうか。怪我はなくとも、毎日浸かって休む！ これについては俺らがベッドで寝る行為と同じだと思つて習慣づけてください。つと、ほかにもいろいろあるんだけど……今のところ、ここまでは大丈夫かな？」

「毎日風呂に入ればいいんだろ」

段々と調子に乗ってきたらしいムロビシの呼び掛けに、カラスはしれつと答えた。

予想と異なる反応に対してムロビシは困り顔を浮かべる。

「おいちゃんいっぱい喋つたのに、かなり簡略されちゃつたような——」

「だからもつと簡単に話せて言つたんだよ！」

自分の乏しい理解力について反省するとか、カラスにはそういつた考えがまるでないようだ。足を放り投げたその姿勢からも興味のなさを余すことなく察せる。一方で、膝を抱え、黙つて頷いたキナリは、少し間を置いてから次の疑問を浮かべる。

「ムロビシとアカアリは、わたしたち廻人をどうするの？」

「——と、言うത്？」

聞き直されて、俯き、言い淀む。ムロビシとは視線を合わそうとせず、それでも気にかかった事柄を解決しようと言葉を選んで、発する。

「……用もないのに、保護なんて面倒なことしないかなって」

キナリのその言葉に耳を傾けたカラスは、それ以降、口を堅く噤つぶんでしまった少女を確認し、天井を仰いで悩むムロビシを見る。

「なんだ。オレたちに用なんかあったのかよ」

「んー、まあ……そういうことになるね。——嬢ちゃんは察がいいや。どうせその話をするなら、隣の部屋に来てもらった方が手っ取り早い。キナリちゃんが食べ終えたら行こうか？」

「……いい。歩きながら食べるから」

なにか焦っているのか、何一つとして底の見えていない食器を抱えようとするキナリ。カチャカチャと音を立てる様子を見て、カラスがすつくと立ち上がると、キナリの手から奪い取るようにしてスープ皿を持つ。

「全部は無理だろ。皿だけは持ってやるよ」

まさかの人物からの、思いもよらぬ配慮だった。気遣いを受けたはずのキナリは、奇妙なものを見るように眉を顰^{ひそ}め、目を丸める。言葉にこそ出さないが、彼女が相当驚き、戦いてすらいるのを感じて、ムロビシはにやにやする。

「ははあん。少年も男だったのねえ」

「あア？」

それはどういう意味なのか掴めないが、明らかに褒められていない。カラスにもその程度の違和感は判断がつく。口端を吊り上げ睨みを利かすと、ムロビシは肩を竦めて見せてから立ち上がる。キナリも釣られるようにして起立。紅茶とパン、小さな手にどちらも握り締めている。

「何でもないよ。そんなじゃ移動しますか」

空っぽになった食器と、キナリの分の卵焼きだけが乗ったトレイを抱えて、未だに座り込んだ状態を保っていたアカアリへ、片腕を大きく上下させて立ち上がるよう促す。女は髪を揺らしながらその動きを目で追うだけでいたが、何度か繰り返された頃には身を振るようにして立ち姿勢を取る。準備が整ったところでムロビシがドアの外通路へ向かうと、これだけは慣れているのか、アカアリもすぐに後続する。

「カラス」

何の気なしについていこうとしたカラスの背に細い声がぶつかる。

「ん？」

指の腹に皿を乗せようと遊び始めた少年が振り返ると、キナリは目を伏せがちに一言だけ放った。

「ありがとう」

「おう。早く食つちまえよ」

どうやら少年は、その感謝の言葉にも大した意味を見出だせない性分なのだろう。

単純な遊びの傍ら素っ気ない返事を終えるカラスに物足りなさを覚えつつも、ある種の諦めがついたように、キナリもドアをくぐった。

ムロビシとアカアリの背を追うように、少年少女は冷え切った廊下を進む。床は一面、剥き出しのコンクリート材。そこを靴も靴下もない素足の状態でぺたぺたと歩いていく。小刻みなリズムに乗って、二人の手に収まる食器が揺れ、甲高い乾いた音を立てる。アカアリの不格好な足音も仲間に加わって、誰も喋りはしないのに随分と賑やかなものだ。壁に目をやれば、床と同様の材質のところどころにコードが這うように駆け巡っているのが見える。弛んだりしていないことから設置した人間の几帳面さが伺えるが、ムロビシが取り付けたのだろうか。まさかアカアリがやるわけもない。

キナリは食器を落とさぬよう、僅かに体に力を込めながら思う。

星霜匣の設置されていた部屋の分ほど歩いた頃、薄暗い通路の片側の壁に、突如ぼつかりと穴が開いた。大きなガラス窓だ。無意識に足を止めた二人は、そこから外の景色を眺め——驚嘆の声を上げる。

「でっけー……」

カラスの率直な感想を耳にして、振り返るムロビシが言う。

「あれがヨサメだ」

落ちてきそうな黒い空がどこまでも続く空間に、塔のような建物が厳格に聳そびえていた。かなり離れた場所にあるようだが、その大きさのせいで周辺の小さな建物との縮尺がちぐはぐに感じられる。眩いばかりの白い壁面は上部へ向かうにつれて細くなる。流線を形成し、雲に届く手前で途切れ、恥部を隠すかのように赤と青の旗を巻きつけ、その尾鰭ひれを風にはためかせている。土台となる部分は、街を割り、地面に根づくように広がっており、さながら大樹の様相だ。

「黒い煙の兵器……」

太陽の光が多く遮断された世界で唯一輝いて見えているのが兵器とは、およそ皮肉のようだ。キナリはそんなことを考えつつ、先ほど聞かされていた話を思い出して呟

く。ムロビシもヨサメを見つめながら、心奪われる幼い二人に話す。

「高さが大体四〇〇メートル、発射口の直径は七メートル。世界中を探しても、あんなに目立つ兵器は他にないだろうな。空一面に浮かんでる黒い雲は、全部ヨサメが一発で撃ち出した物だ。そんなでもって、あいつが気まぐれに降らす黒い雨つてのが諸悪の根源……。誰が言い始めたのか知らないけど、巷では『雨毒』って呼び名が定着してるね。あらゆる生き物に対して毒をもたらす雨……。何の捻りもないけど、分かりやすくていい」

侮蔑を含んで鼻を鳴らし、男は再び歩き始める。この説明の間も先に進んでいたアカアリは、すでにどこかへと姿を消していた。これで何度目になるか、カラスとキノリは目を向き合わせる。互いに何かを言うつもりもないのだが、反応に困ると自然と助けを求めるようになるらしい。それを妙なものだと思いつながら、ムロビシに置いて行かれぬよう追いかけてしようとしたキノリから、カラスはひよいとパンを奪う。

「いつまでも食わないならもうぞ」

了承もないままかじりつく。止めようとしたキノリへ半分ほど残ったそれを戻そうとするが、「もういい」と器ごと突っ返され、代わりに持っていたスープレ皿を奪われる形となる。さすがに怒らせた原因が自分にあることは分かったが、急ぐように離れ

ていくキナリを呼び止める気も起きず、残りのパンを口へと放る。

非常識なカラスの行動に憤るキナリが追いついたころ、ムロビシは補足を口にす。
「ちなみに、俺ら人間は未だにあの雨に打ち勝つ手段を知らないが、植物や昆虫たちの中には雨毒に当たっても平気な種が出始めてる。進化が早いのは羨ましいねえ」

目的地らしい部屋への入口へたどり着く。二人の姿を確認するためか、一瞬目を配らせたムロビシへ、カラスは文句をぶつけるかのように言葉を投げる。

「それを言ったら、オレら廻人だって大丈夫なんじゃねーのかよ」

「いや……多少の耐性はあるようだが、直接中てられちゃ駄目だね。こればかりは星霜匣でも治癒できないって報告が複数挙がってるし、生き抜くためには覚えておいた方がいい。雨毒を回避するなら、降り始める前に屋根のある場所へ避難することが最低条件だ。インフラの整っている街中なら野外でも警報が入る。戸締まりのできる屋内にいれば、ひとまずすぐに影響が出るような状況にはならないよ」

言い終わると同時、部屋の内壁に備えられたスイッチを押す。ぱちん、という快音と共に、じんわりと明かりが点ると、書類でゴった返す正方形の部屋が現れた。膨大な量の紙が積み上げられているが、老人のいた地下室ほど汚れているわけではなく、単純に収納スペースが足りていないらしい。そうは言っても、限界を超えて崩れてい

る書類群もあるが——。小山のように崩れた紙の海を眺めていると、そこから突然、にゆるりと白い腕が生える。驚きの声を漏らすカラスの反応を嘲笑うかのように、それは紙を大雑把にかき分けると、埋まっていた自身の顔を掘り当てた。アカアリである。どうやら他の三人が立ち話をしている間に真つ暗な部屋に入っていたらしい。上を向いて倒れたまま無表情に天井を仰いでいる様子から、相手を驚かすというような遊び心が彼女にあるようには思えないが……。

「また悪戯したのか……」

一方、ムロビシは呆れたように肩を落とし、しかしこういつた状況が珍しいわけでもないのか、ゆっくり彼女に近寄り書類をまとめ始める。それをじつと観察していたアカアリだが、すぐに飽きたのか、両足を振り、その勢いを利用して立ち上がる。手も使わずにするからだろう、ゼンマイ仕掛けのおもちやを見ている気分だ。目下で働くムロビシに悪びれる素振りも見せず、今度は部屋の小窓から外を眺め始めた。

やれやれと嘆きつつも作業を終えたムロビシが、腰を押さえて立ち上がる。

「犬猫の相手をしてるわけじゃないはずなんだけどね」

「それよか面倒くさそうだな」

「まったくだ」

心配するほどでもないが賛同するカラスに愚痴を漏らす。ある程度まとめ直した書類を元あった机の上に戻すと、その机を避けるように左へ進み、複数の道具が鎮座する部屋の一角へと向かう。ムロビシよりも背丈のあるものから掌大のものまで、大小様々ある。

「君らを保護した理由はコレだ」

中でも一番大きな金属製の器具を軽く叩くようにして触れる。

「身長計、体重計、血圧計に血液検査器具一式。そのほか星霜匣に備えつけられているメーター類も含め、全て健康状態を知るための道具だな」

ひとつひとつに触れたり、持ち上げたりしながら名称を呼称していく。そう言われても何物だか理解できていないカラスとキナリの反応の薄さを気遣って、体重計という器具に乗ってみせた。台の前に備わった秤の針が大きく振れ、やがて振り幅を狭めて細かい目盛りを指していく。

「乗った人の重さを知るものだね。他のものも似たような使い方をするんだけど、注射器だけはちよつと違う」

「……見た目が優しくねーな」

「あながち間違っていないかな？ 大雑把に言うくと、腕とかにブスツと刺して、ピスト

ンをギョツと引つ張つて血を抜いたり、押し込むことで薬を入れたりできる、使用するにはちよつと痛みを伴う医療器具だね。まあ、アカアリに刺されたときに比べたら痒くもないはずだし、安心してくれていい」

他人事だからだろう、愉快に笑うムロビシ。実際に被害に遭つた二人としては、そのあまりにも無神経な男に殺意すら抱かん勢いである。

気に食わない点は多々あるものの、部屋の中に関心がないわけではない。二人の警戒心も今までに比べれば落ち着いてきた様子で、特にカラスは部屋の奥まで歩み入り、見たことのない物品の見学に勤しんでいる。壁掛け時計、コンピュータ、冷蔵庫……どれもが目新しく、そして騒がしい。カラスの手からいつの間にか棚の上に放置されていた食器をムロビシが回収するのを瞥見、キナリは慌ててスープ皿を口につけて傾け、中身を一気に飲み干す。

「実のところ、廻人の資料は圧倒的に足りてない状況だね」

口の周りについたスープを舌でどうにか取ろうと必死のキナリから最後の食器を受け取り、すぐ近くの洗い場へ全てを積み重ねると、ムロビシは改まったようにそう切り出した。振り返り、簡素なキッチンの縁に寄りかかり、腕組み。足は楽に放り出している。

「基本的な体の構造は元々いる人間——便宜上『旧人類』と区別されてる俺らと大差ない。とは言え、今後のことを考えて、辛抱強く調べておかなければならないことも多い。星霜匣の作用に個体差が顕れるのか、旧人類が雨毒で喪失した身体機能は正常に働いているのか……知るべきこと、やるべきことは山ほどある。生活面における情緒の観察やアドバイスを提供する代価として、データ採取に協力してもらいたいというのが俺たちの活動目的だ。どうだろう、さっきまで水に浸かった割には髪も服も乾いてきてるんじゃないかな？」

言われてみれば……二人はそれぞれ自身の衣服を確認してみる。肌貼りつくほどずぶ濡れだったはずの髪や服は、完全に水気を失せて乾燥していた。キナリの結んだままの髪ですら、その通りである。

「それも原理が解明しきれていない廻人に関わる不明点の一つだ。物は試しに、俺も星霜匣にざんぶり入ってみたことはあるんだけどね。少し粘性が気になる以外、ほとんど水風呂に入ってるのと変わらなかった。旧人類には何の作用もしないものが、新人類に対してだけ特殊な反応を見せる溶液……。肺に流れ込んだはずの水分も、使用者が目を見ますと共に体内へ吸収されていくらしい。もちろん、これも廻人に見通す話だ。まったく不思議なもんさ」

カラスが嫌そうな顔で、思い当たる節を話す。

「そういや、さつき起きたときも思いつきり水飲み込んでたな……」

「つふふ。ものすごい勢いで咳してるの、ここまで聞こえてきてたよ。もしそれを旧人類がやったら、死ぬかも知れない愚行だなあ」

「何でちよつと楽しそうにしてんだ。殴られてーのか」

完全にかかわれているカラスの後ろ、キナリは不服そうにムロビシのことをじつと見つめている。何か言いたげな少女に気づくなり、おどけたように眉を上げると、僅かに声色を鈍らせる。

「——君らを保護した理由、だったっけね」

ムロビシの視線が移ったことを察し、カラスもキナリの方を向く。キナリはそれに対して罰が悪そうに自分の手元を見下ろすが、すぐにムロビシを向き直り、小さく頷いて見せた。

「何だよ……おっさんもキナリも、そういう難しそうな話したがりだな」

「カラスくんはもうちよつとキナリちゃんを見習ってもいいと思うけどねえ」

「放っとけよ。こんなのがずっと続いたら体鈍っちまうっつーの」

居心地が悪いように、目に入ったソファへと飛び乗るようにして腰を下ろす。穴だ

らけで中身も出てきているが、冷たい床に座るより遙かにマシだ。むすつとしてムロビシとキナリを交互に見るが、特にめぼしい反応はない。

ムロビシはその場に居直ると、口を開く。

「正直に話そう。さっき紹介した道具や君らの普段の様子から取った、あらゆるデータ及びそれらの物的証拠となる物品は、新人類の研究機関に売り払うことになる。金と物々交換だな」

「カネ？」

「あらゆる物を入手するのに必要になる物さ。食い物も、着る物も、君らに必要な不可欠な星霜匣も、ほとんどの場合は金がなければ手に入れることは難しい。昔ほどの抑止力はないが、人間社会には法律っていう決まり事があるもんでね。その辺を偶然通りかかった他人から追い剥ぎをしまくるなんてわけにもいかんのさ」

「いまいち理解していないカラスとは違い、キナリは何となく結論の予想が立てられるところにいる。不明点がいくつか、ぴたりと辻褃が合った気がしたのだ。」

ムロビシは間髪入れず、なおも続ける。

「その収入のおかげで、俺やアカアリ、ひいては他の『保護班』のメンバーも飯にありつけている。もちろん、ここに保護される身でいる以上、君ら二人が衣食住に要す

る費用を賄う出処もそこだ」

「……保護班？」

キナリの小さな疑問にもすぐさま答える。

「俺たちが属する組織の名前みたいなものだね。新人類雇用推進派・保護班……これは追々話そう」

腕組みを解き、キッチンにもたれている腰部脇に両手を持っていく。

「特別難しい話でも、君らだけが損するような提案でもないだろ？ こちらが人並みの生活環境を保証する代わり、二人には健康診断を兼ねてサンプリング調査に協力してもらおう。強いて言うならば、採取した血液を始めとする諸々のモノが、見も聞きも知らぬような第三者の手に渡る点については我慢してもらわなきゃならない。……本来なら、新人類であるアカアリにも頼みたいんだけど、麻酔銃でもない限りはまともに検査できないってのは、君らの経験からも難易度の高さを理解してもらえると嬉しいかな」

好奇心もなければ、話の大半の内容を理解できずにいたカラスだが、アカアリが新人類であるという旨のみ聞き逃さなかった。カラスがアカアリへ負わせたはずの首元の怪我も、今では綺麗さっぱりなくなっているのも納得がいく。

(つつーことは、ただ殴る蹴るしてもアカアリには勝てねーな……)

負けたままでいたくないという悔しさからだろうか、カラスの偏った興味はそちらの方向へと舵を切った。対して、小さな身振りすらせず聞き入っていたキナリを向き、ムロビシは問う。

「さあ。そうと知って、君たちはどうする？」

キナリに動揺の色は見えないが、すぐに返事が出てくる気配はない。適当なことを言えない空気が漂っているのはカラスにも分かった。

話なんかどうせ聞いていなかったし、ここはキナリの返事を待つべきか。カラスはそう思って呆けていたのだが、当然ムロビシも同じ考えであるため、ただただ沈黙が続いていく。キナリを手助けするつもりはないが、このままでは窒息しそうだ。

「……オレはそれでいいぜ。大人しく言うこと聞いてやるつつー約束はできないけどな」

根負けしたカラスがそう言うと、ムロビシは変わらぬ調子で「はいはい」と相槌をよこす。

「年頃の男の子が相手だ。こっちも最初からそのつもりではいるけど、アカアリがいることは忘れないでもらいたいね」

「オレが暴れたらあいつに押さえさせるってか？」

「アカアリは俺にとつても危険な存在であることに違いはない。声掛けを一つ間違えるだけで死に目を見たこともたくさんある。アカアリを怒らせないように生活しなきゃならない状況はお互い様だつてこの確認だな」

すぐに話をまとめてしまったカラスを横目に、キナリは胸の辺りで祈るように指を軽く組む。

「わたしは……」

知りたいと思ったことを尋ね、ムロビシはそれに答えてくれたのだとは思う。しかしそれは同時に、即座には咀嚼できないほど酷薄なものだった。カラスは今までの一連の説明をどのように捉えて了承したのか分からない。もしかして、深く考えずにいるのだろうか？ そうだったとして、では自分だけが同行を拒否したところで、これ以上事態は好転しようもないのではないか——。少女の頭は、甲乙つけ難い葛藤に悲鳴を上げていた。

ふと、窓際に佇んだままのアカアリと目が合う。人一人いない外の景色を見るのも飽きたのだろう。三人のやり取りを無言で、無感情に眺めていたようだが、内容を理解しているわけでもないはず。それなのに——彼女の青い瞳に、何かしらの思考が

浮かんで見えた気がした。早く答えを出さねばならないという緊迫感からの思い込みもあるのかも知れないが、それでもキナリの気分は大きく転換した。

ある決意を胸に、ムロビシに向き直る。

「……お願いがある」

「いいよ。話してごらん」

不安そうな上目遣いではあるが、これまでと違って視線を逸らすことはしない。寡黙だったキナリが意思を見せた瞬間である。少女の切り出し方は意外だったのか、はたまた予想の範囲内だったのか。ムロビシは何も語らずにんまりして、姿勢もそのままにキナリの言葉を待つ。

度胸を試されているようで快くは思わない。しかし、すでにここまで吹っ掛けてしまったのなら、喉奥まで出かけた言葉を飲み込むのはもったいないのではないか。掌がしっとり汗ばんでくるのを感じて指組みを解き、ぎこちなくも伝えるべきを吐く。「……わたしたち、まだまだ知らないことがたくさんあると思う。きつと分らないことばかりで、いま、全部を質問し切ることはできないくらい。だから、疑問に思ったことはそのとき一つずつ訊いていくから、ムロビシには応えて、教えて欲しいの。それで、もし、ムロビシが嘘を言っているんだと思ったら——わたしはここには居ら

れないかも知れない。それだけ約束してもらえたら協力する」

少ない語彙から選りすぐった言葉を繋げたキナリの主張は、迷いを浮かべながらもそこで完結したようだった。ムロビシは「なるほど」と頷くと、側にあつたペンを手に取り、話を聞きながら書類の裏面に何かを記し始めた。相当緊張したのだろうか、小刻みに指先を震わせるキナリがほうと浅い溜息を漏らして俯く。心労募る相方を横目にしたカラスは、ムロビシが書き終えるまでまだかかりそうなのを察し、合いの手のように間を割る。

「オレも最初っからそのつもりで返事してるからな。テメェらにあれこれ素直に従う気はない」

「ああ、肝に銘じておくよ」

ほとんど聞き流すようにカラスをあしらうと、ペンを机上に放り投げ、手書きの文面を顔の横に掲げた。裏の文面が透けて見えてしまっているが、それを隠すように大きな文字で四行、何かが殴り書きされている。窓際にいたアカアリは、ムロビシの手から離れたペンをいじりに数歩分だけ移動して、また静かに静止した。目はムロビシが持つ紙を追っている。

「じゃっじゃーん！ どう？」

やたらと大きな声を上げ、拍子抜けする少年少女それぞれへと紙面を向ける。ぞんざいな扱いに苛立ちを見せるカラスが舌を打つ。

「どう、じゃねーよ。オレの話、ちゃんと聞いてたのか」

「聞いてた聞いてた」

おそろくほとんど聞いていないような相槌が、再三カラスの言葉を撥ね退ける。

「さっきキナリちゃんと言ったことと、それに対しておいちゃんが取るべき行動を簡条書きしてみたんだよね。まあ、ここまで常識的なことをわざわざ書き留めるってのもおかしいもんだが……」

高人口密度の部屋を横歩きで移動し、手に持っていた紙を、テープを用いて壁に貼り付ける。上の二角のみを留めて一旦離れるものの、すぐ不満が湧いたのか小首を傾げ、下二角も同様にきっちり留めると、今度こそは満足といった様子だ。軽く紙を叩いて振り返る。

「破っちゃならん契約事ってことでここに貼っておくよ。二人とも字は読めないんだったね？ 勉強したいっていうなら仕事の合間に教えよう。このメモも直に読めるようになる」

「オレは興味ない」

念押し主張する少年を小馬鹿にするように、無精髭の生えた口端を上げる。

「だろうねえ。キナリちゃんの方はそうでもない風に見えたけど、どうだろう？」

ムロビシの問いかけに、キナリは一寸の迷いもなく肯定する。少女にとっては、この上なく関心のある事柄だ。自分から頼み込む手間が省けてラッキーだったと、先程までの緊張はどこ吹く風、内心は晴れやかな気分でさえある。ころりと目の色を変えたキナリを落ち着かせるよう、体の前に両手を挙げてジェスチャーを取る。

「了解、了解。幸い、教材に打ってつけの本と書類は山ほどある。例えばそうだな——これとかいいんじゃないか？」

部屋の中央に鎮座する大きな机。その椅子の真ん前にあつた四枚留めの書類を手に取り、キナリのか細い両手へと渡す。しかし、これだけ会話ができる割に相変わらず字は全く読めない。分かりきっていたはずのその事実、キナリは少しだけ落ち込むが、一枚目を眺め終えた頃、あることに気がつく。

「これ、地下室にあつたやつ……」

そういえば、持って帰ってきた書類があるとムロビシが話していたのを思い出す。

「二人の出生に関わる書類だったよ。主文の一行目、これが『カラス』で、その一つ下が『キナリ』って読む。じいさんが君ら二人にちゃんと名前を与えて、なおかつど

ちらも最初からその事項を記憶として認識していたって証明になる部分だ。……この辺りのことは、書面を読み進めながら話した方が混乱しないかもなあ。まずは自分の名前を読み書きするところから始めっかね」

「うん——」

食い入るように文章を眺めるキナリに呆れた様子で、カラスはソファから立ち上がる。すっかり忘れていた床の冷たさに一瞬身震いする。

「……おっさん、オレはあのヨサメとかいう建物が気になんだけど。どこから外に出れんだ？」

「ああ、案内しよ——あっ！」

言葉の途中で何か閃いたように声を上げる。急変したムロビシの語調に、カラスは驚いて目をぱちくりさせる。

「な、なんだよ！」

「いや、外に出るついでにちよつとしたお手伝いをしてもらおうと思って。なあに、体慣らしにちようどいいくらい雑用だよ」

「面倒くせー。やらねー」

「めんどくない、めんどくない——」

男二人の会話を無視して自分の世界に没入していたキナリの手から、書類がひよいと奪われる。不意を突かれて「あっ」と呟く少女の手前、ムロビシが面目なさそうに歯を見せる。

「悪いんだけどさ、キナリちゃんも付き合ってよ」

「……」

「おいちゃん、約束は守る男だよ？ でもね、奔放なカラスくんだけだとどうも信用に欠けるのよ。勉強については後回しにしてもらえないかな。この通り、頼みます！」
大袈裟に顔の前で手を合わせる男に圧され、キナリは渋々了承する。良く言われなかったカラスはやはり文句を垂れ流しているが、いい加減ムロビシも小言の相手をすることすら飽きたらしく、無視を決め込み、再び廊下に向かいながら「こっちこっち」と手を招き、話を続ける。

「さっきまちょこつと話した雨毒に順応した植物のことなんだけどね。一度生えたら増えに増えまくっちゃって、建屋の周り一面を覆わん勢いで……放っておくと湿気はひどい、虫も住みつくで堪らないから、草刈りをしてもらいたいんだ」

星霜匣のあった部屋とは反対方向を進むと、鮮やかな橙色に塗られたドアが現れた。その脇、壁に立てかけられていた二つの刃物をそれぞれ二人に差し出す。不貞腐れて

いたカラスだが、興味を持ったらしく、何も言わずに受け取る。

「鉈と鎌ね。仕事が落ち着いたときに俺一人でやってはいるんだけど、なかなか追いつかなくて困ってたんだよ。とは言え、まさかアカアリが手伝ってくれるわけでもないでしょ？ おいちゃんの体を労るつもりでさ、ねっ！」

「……わたしもやるの？」

「勉強は雨の降っているときにやろう。明日の昼頃までは曇り空のまま持つらしいから、今のうちにしかできないことを片付けましょう！ はい！」

なおも洩るキナリにほとんど無理矢理に鉈を持たせて、ドアを開け、二人を外へと押し出す。

「刃物だから無闇に振り回さないように。カラスくんは特にね」

「やんねーよ！ 草刈り自体やらねー！」

「その辺は二人の自主性に任せるよ。断りもなく遠くに行かれるのだけはご遠慮いただきたいけどね。おいちゃんは溜まつてる仕事の片付けに入りまーす」

「キナリだけじゃなくてオレの話も聞け！」

「なるべく根っこの方から刈り取るようによろしくー」

ひらひら手を振るムロビシがドアの奥へと消えていく。がしゅん、と完全にドアが

閉まると、いよいよ二人は困惑と憤怒に駆られる。ひんやりと湿っぽい一陣の風が吹きつける中、キナリが先に口火を切る。

「わたしたち、良いように遣われてる気がする」

「……そうやって思ってる割には大人しかったな。もつと言い返してやったらどうなんだよ。聞いててイライラする」

「言い返したところで、たぶん勝てないんじゃないかな」

「だったら——！」

「殴りかかったとしても、あんなに近くにアカアリがいたらまた返り討ちにされただけだと思う。今のわたしたちには、ムロビシの隙を突いて逃げるようなことはできない。保護っていうか、捕縛？」

力のない、情けない表情のままのキナリだが、直感だけでは彼女にすら勝てそうにないとカラスは悟る。言い返す言葉も思いつかず、眉間に皺を寄せたまま激情を抑える。

「……難しい言葉知ってるんだな」

「知ってるのは意味と音だけ。字は読めないし、書けない」

「何でそんなに字にばかりこだわってるんだよ」

「それは……自分でも分からない」

カラスに指摘されると、癖なのか、視線を下げて指を組む。

「でも、ムロビシにはすらすら読めているものが一文字も理解できないのは、なんていうか、悔しくて仕方がない感じ。カラスがアカアリに力負けして悔しがってるのと一緒に思う」

「悔しいわけじゃねーよ。あの女がブツ飛びすぎて強いのが気に食わねーだけ！」

ムロビシに渡された鎌を振り回して、自分の背丈ほどまで伸びた草を刈る。凶星なのを隠すため、あるいは鬱憤を晴らすための行動にしか見えないが……。草刈りはしないとか、刃物を振り回すことはしないとかなんとか言っていたことについて揚げ足を取るのはやめておくことにした。その代わりに、カラスの興味を刺激していたらしい物を出して、キナリは催促する。

「ねえ」

「なんだよ」

「ヨサメ、見たいんじゃないの？」

はっとして振り返るカラスに、遠くに聳そびえる巨大な建造物を指差す。

「屋根が邪魔で見えづらいかも。裏に回り込んだ方が——」

キナリのアドバイスが終わる前にカラスは駆け出していった。裸足のままばたばたと走っていく少年の姿を、窓ガラス越しに笑うムロビシがキナリの視界に入る。自発光する機械と書類を交互に見ている。あれが仕事というものだろうか。

カラスの後を歩いて追いながらムロビシの一举一動を観察していると、一度は閉じたはずのドアが再び音を立てて開いた。慌ててそちらを注視する。そこには、手ぶらのまま鉛色の空を見上げるアカアリがいた。ムロビシの介助もなく、一人だけで出てきたようだ。草刈りを手伝うわけではなさそうだが、キナリに何か仕掛けてくる様子もない。初対面の際の印象があまりに強烈だったせいでアカアリに対する警戒心は並大抵のものではないが、もしかしたら彼女の普段の姿は、ちょうど今のような状態なのかも知れない。微かにそう思ったものの、彼女から受けた仕打ちは簡単に心を許せるほど優しいものではなかった。念には念を、警戒を解かぬよう忍び足でカラスへ近寄り、アカアリの接近を伝えることにする。

「カラス」

アカアリの瘤かんに障らぬよう、なるべく物音を立てずに小走り、丘の上に立ち尽くすようにしていたカラスへと声を掛ける。間違っても大声にならないようだ。いぶ声量を抑えているものの、そこには隠し切れない焦燥が表れており、決して耳に届かないよ

うなものではないはずなのだが、カラスは一切振り返そろうとせず、視線はすでにあ
る一点へと釘付けだった。

草木の枯れ果てた荒涼とした大地の果てに見えるのは、白い、巨大な塔。金糸で装
飾された赤と青の長旗に包まれて、まるで荘厳を絵に描いたようだ。その足下には数
え切れないほどの小さな建物が群れを成している。先程も廊下の大窓から眺めたばか
りの光景だが、周囲を壁に遮られていない分、さらに一回り大きくその存在を感じる。
分厚い黒い雲から僅かに漏れているらしい陽光を巨大な身に受け、ヨサメと呼ばれ
る兵器は神々しくも禍々しい輝きを纏い、カラスの好奇心を湧き立たせていた。ヨサ
メの何がそこまでカラスの気を惹くのか理解できないが、今のキナリにはその疑念を
解消させるよりも前にやるべきことがある。呼び掛けに対するカラスの反応はないも
の、不安を露わに言葉が続ける。

「アカアリ、外に出てきた。追いかけてきたのかも」

「……アカアリ？」

心地の良くない名を耳にして、さすがに視線を逸らしてキナリが指し示した方向へ
と振り向く。カラスのその動きを確認してからキナリも同様にアカアリの姿を捉える
のだが――。

「なんだよ、こつち来ねーじゃん」

二人の元へやって来ると思われた白髪の女は予想を裏切り、背を向けたまま少年少女の立つ場所とは正反対の荒野を指指して歩み出していた。足取りはふらりふらりと相変わらずも不器用で、靴の踵を擦るような音が途切れることなく聞こえている。それも彼女の姿が遠くになっていくにつれて小さくなり、ついには完全に消えていった。

カラスが怪訝そうにキナリを見下ろす。

「オレたちに気づいてないんじゃないかねーの」

「……確かに、目は合ってなかったけど」

ちよつとした失態をカラスに指摘されるのが納得いかない気持ちもあり、早とちりしたことを悔いる。善意のつもりが仇となって返ってきてしまった気分だ。これほどまでに気を張るのも、キナリにとってアカアリが天敵であることの表れであるのだが、同じく刃物で刺されるといふ恐怖体験を経たはずのカラスはいまいち危機感が鈍いような気がしてならない。地下室で彼が老人を殺めた際に覚えた違和感に通ずる感覚だ。アカアリのその後の動向を気に留める様子もなくヨサメを向き直るカラスに、今一度、互いの意識の違いを擦り合わせてみようか試みる。

「アカアリ、どこかに行くのかな」

ごく普通の会話の流れだが、カラスは面倒臭そうな表情を浮かべる。キナリを一瞥しようとするしない。

「……さあな。あいつがいなけりや、オレらは安全ってことでいいだろ」

「でも、それってアカアリが外に出るのをムロビシは許したってこと？ わたしたちには遠くへ行くなって言ってたのに」

「あんなあ——」

終着点のない問い掛けにうんざりしたらしいカラスが珍しく呆れたように息をつくと、細いキナリの左肩に右手を叩きつけられるようにして置く。その衝撃が伝播して左胸の生傷が痛み、キナリは一瞬顔を歪める。

「一つだけ言っとく」

凄みの効いた声色が唸る。キナリが次に前を向いた時にはカラスの顔が眼前まで迫っており、初めて見るような凶暴な感情を露呈していた。それを視認するなり、キナリは背筋は凍らせ、恐ろしさに息が詰まってしまう。

「そのクソどうでもいい話、オレの邪魔をしたくてやってんなら覚悟しろよ。オレがお前にだけ暴力振らないなんて言い切れねーぞ」

彼の突発的な行動を理解できないままだが、慈悲もない双眸に睨みつけられ、地下

室の一件や、アカアリと対峙していた当時のカラスを思い出してゾツとした。声が出せるような余裕はないが、ちゃんと話を聞いていることは伝えなくてはならないと、一回、二回と首を縦に振って見せる。するとそれを見たカラスは、案外すんなりとキノリの肩から手を離し、半歩後退。すぐに口端を意地悪そうに持ち上げた。つい先程まで放っていた鋭利な悪意は、すでに微塵も感じられない。

「……お前、ビビリだな」

言って、ぽかんとするキノリをその場に置き、周囲に生えていた雑草めがけて鎌を振る。叩き切られた白っぽい葉がいくつか宙を舞っては力なく墜落していく。

「フリだよ、フリ。ま、嘘は言っただねーんだけど」

「ふり……？」

カラスの語気の変化を掴み、どうやら気を緩めても良さそうだと判断する。緊張から硬直した全身の弛緩が上手くいかないのを感じつつ、囁くほどしか喉から出てこない声を振り絞る。

「あんましつつこく話し続けるんなら、そういう事故もあるかも知れねーってこと。急に手出してびっくりされるより、先に注意しといた方がいいと思って」

ざくざくと音を立てながら、一帯に生え揃っていた背丈の高い雑草たちの殲滅を楽

しんでいるようだ。

「キナリはさ、ぜんぶ難しく考え過ぎじゃね？ 今のオレたちじゃアカアリにもムロビシにも勝てやしない。だからあいつらに喧嘩を売るのは少しの間はやめることにしただけ、だろ？ それ以外のことまで考えたって、どうせ答えなんか出るわけねーよ。あの二人がオレたちのことを都合良く遣おうとしてるように思えんなら、こっちも同じようにしてやろうぜ」

やがて視界に入る雑草が消え失せたのに満足したのか、ようやくキナリを振り返る。

「今はそんな感じでいいじゃんか」

いつものようにすつとぼけたカラスだと、キナリは安堵した。

しかし、その口から放たれた言葉はキナリが計り知ろうとしていた範囲を大きく上回っていた。無知で無頓着なことを恥じるでもなく、驚くほど短絡的で、自分のしたいことを最優先するだけの単純な少年……かと思いついていたのだが、どうやらもう少しばかり視野は広いらしい。もちろん、彼が込み入った話になるとすぐに声を荒げるのは、単に深く思考を巡らせるのが性に合わないのも大きな理由だろう。だが、そうして話題を切り捨て意思表示したときには、すでに彼なりの答えは出ていて、次の問題点——何よりも、自身が強烈に魅せられる事柄に意識が集中してしまっているの

ではないか。

「……ダメじゃない。けど、わたしはそんな風にできないのかも」

なんだ、一番無頓着なのはわたしじゃないか——。そんな弱音を飲み込んで、キナリはまるで関連性のない疑問をカラスに投げける。

「ねえ。ムロビシから廻人のこと聞いてみて、どう思った？」

「またそういう……」

「星霜匿さえあれば便利でいいや、とか？」

ややこしい話は聞き飽きたとでも言いたげだったカラスが、キナリの推測を耳にするなりぴたりと止まる。見事なまでに凶星だった。言い返すこともせずムツとしてしまったカラスに、キナリは淡々と進める。

「カラスはアカアリに勝ちたいって言ってたけど、それとおなじみたいに、わたし、ムロビシの言いなりにはなりたくない。いろいろ考えたりするのも、どうしても文字が読めるようになりたいと思うのも、どっちもカラスにはどうでもいいことなんだろうけど、わたしにはすごく大事なことなの。その逆で、アカアリと戦って勝ちたいって気持ち、わたしは分からない」

最後の一言に眉尻を上げたカラスを無視してしゃがみ込み、すっかり存在を忘れて

いた鉈を使い、彼による乱雑な除草作業のせいで半端に残ってしまった草葉の処理を始める。

「……さっきのカラス、すごく怖かった」

左手で数本まとめて握り、ムロビシの言っていた通り根元の方に鉈を押し当ててみると、鈍い音と共に地面から切り離すことに成功した。想像していた手応えと違うのが気にはなるが、おおよその要領はこんなものだろう。左手を振るって、死んだ草を放り捨てる。

「もしかしたら、もうカラスには頼れないのかもって。そしたら、わたし一人でどうしていけばいいんだろうって思ったし、それよりも先に、カラスに殺されちゃうのかも知れないとか、全部まとめて怖くて仕方なかったの。本気じゃなくて良かった」

「……本気のカラスだっつってんだろ。ただの脅しじゃないぞ」

「フリなら、大丈夫。ほんとにそうなるまでは、一人じゃできないことも、二人で助け合えばなんとかなるような気がする」

背中を丸めて刃物を重たそうにしながら振る少女は、俯きがちに呟く。

「わたしはそうやって、カラスに頼ったりしながら、戸惑っていくしかない……かな」
段々と声が小さくなっていく。そのままこの場から消えていなくなってしまうので

はないかと錯覚しそうなほどだ。彼女の暗がりな思考はまだしばらく改善されそうにないだろうと、カラスはある種、諦めがついた。

キナリの手前、どかっと地面に直接腰を下ろして足を放り出す。澱んだ少女の顔が見える。

「そんなじゃ、オレは体鍛えてアカアリをぶちのめすのが目標。キナリはお勉強してムロビシのおっさんを見返してやるのが目標。そんで、ここから抜け出したらヨサメまで行く」

簡素で明解な目標がカラスの口から宣言される。これまでの会話にはなかったはずのヨサメ到達がちゃっかり組み込まれていることを、キナリが聞き逃すわけもない。

「ヨサメのことなんだけど」

間髪入れず事に触れられ、カラスが不服そうに顔をしかめる。

「なんだよ。興味ないとか言うなよ」

「そうじゃない。ムロビシに頼んでみたら連れて行ってもらえたりしないのかな」

「どうやって」

「クルマ。カラスはアカアリにやられて気絶しちゃってたけど、すごく速く動く道具に乗ってここまで連れて来られた。わたしもあの時は余裕なかったから詳しいことは

分からないけど、建物のどこかにあるはず」

キナリの提案とその根拠を聞くなり、カラスは慌てた様子で立ち上がる。この調子だと、また今すぐにでも駆け出して行ってしまいそうだ。寸でのところでカラスを制止し、鉈を顔の横に持ち上げ、見えやすいように構える。

「その前に、ちゃんと草刈り終わらせよう」

「何言ってるんだよ。それどころじゃねーって」

「こっちから頼み事、するんでしょ？ だったら、先にムロビシからの頼み事終わらせなきゃ。アカアリが帰ってくるまで、こんな危ないもの持つてるのイヤ。下手に刺激したりして痛い思いしたくない」

納得のいく道理だ。キナリの危惧する事態に転がれば、また星霜匣に浮かぶことになるだろう。その分ヨサメにたどり着くのも先延ばしになる。今を急ぎたい気持ちがあるかなか収まらないでもどかしいが、痛い目に遭いたくないのはカラスも一緒だった。「……しゃーない。バレねーように適当にやるか」

「どうせバレるから、丁寧」

互いの性分を考慮して、補い合うよう行動する。少年少女が最初に覚えた、最も人間らしい行為の一つである。その進歩を実感することはないようだが、キナリの監視

の元、二人の雑用消化が始まった。

* * *

煌々と輝くコンピュータ画面の前、ムロビシは頼杖をつけて外を眺める。

いつもと変わらぬ黒々とした曇天と、ただひたすらに続く荒涼とした大地。その先に数十軒の家々が建ち並んで見えるのが、カラスとキナリを発見、保護してきたキャレーと呼ばれてきた集落だ。農耕に適した広大な平地と緩やかな丘陵を有する農村として、首都であるロットラントにも大量の農作物や食肉を出荷していた。それがつい三年前までの話である。今はヨサメの放った雨毒によって潰えた、数ある町村の一端でしかなく、生き永らえている市街地では「はいがい廃街」と蔑称されるだけの廃墟と化してしまった。

昨日までと違う景色があるといえ、雑草以外は何もない庭先を少年と少女が二人、自由気ままに練り歩いているということくらいか。あの黒い雲さえなければ平和そのものの情景なのだが……。この思考も、毎日繰り返している。あまりにも無為なものだ。浅く、素早く、鼻から息をふっと吐くと、画面の隣に置いてある電話の受話器を

上げ、登録済みの電話番号を選択して、発信。呼び出し音を耳にしながら、道草に油を売りつつも着実に除草作業を進めるカラスとキナリに感心する。

「……二人とも、意外と真面目だな」

四回目の音がした頃、相手方が電話口に出た。

『はいはいー。こちらシグレ交易ツス！』

明るく快活な、若い男の声だ。愛嬌溢れる聞き慣れた声を耳にして、ムロビシも僅かながら余所行きよそを装う。

「どうも。保護班のムロビシです」

『あー、どうもどうも！ どうツスカ、その後、彼女は変わらない感じ？』

背もたれに体を預けて笑う。

「変わらない、変わらない。今も日課の徘徊に出掛けたばかりだね。おかげで羽を伸ばして子供が二人、目の前にいますよ」

使い終えた書類を裏返し、画面の前に転がしたままだったペンを手にして、メモを取る体勢になる。話の内容に合わせて外の二人の様子をちらりと見てみると、カラスが気怠げにこちらを指差し、キナリへ何かを訴えていた。大方、途方もない愚痴を口静かな少女にぶつけているのだろう。損な役回りばかり担わされているキナリに同情

する。

『本部様からご報告ちようだいしてるツス。カラスくんとキナリちゃん……ボクと同年代ツスね!』

受話器から絶えず紙の擦れる音が聞こえている。これもムロビシにとつてはいつものことだ。電話口の男——シグレ交易という貿易商の窓口係を務めるこの男、いつも人手が足りないとはぼやいては、散乱した机上をまさぐり、相手に見合った資料を探しながら会話を続ける。ある意味では器用な芸当とも言えよう。そして「整理整頓がなっていないと上司に怒られるツス……」なんて、最後に悲しげに呟く。大体この流れを経て通話を終えるのだが、反省して生活を改めるほどの暇もないらしい。今日も好調にペーパーノイズを発する男に、ムロビシは変わらず応対。

「もしそうだとしたら、その社交性を髓まで叩き込んでやってもらいたいくらい聞かん坊で……これからを想像するだけで頭が痛い何の」

『それはそれは、今後が楽しみツスねー』

ケラケラと笑う声は、今のこの国ではなかなか浮いた無邪気さである。

『えっとお、今日はご注文いただいた商品の件でよろしいツスか?』

「ええ。急ぎの物じゃないけどね。いかんせん金額が大きいから大まかな納期だけで

も聞いておきたくて。ほら、うち締日うるさいじゃない？」

『ソッスね……弊社経理がケツを叩かれてるって噂は耳にするッス……』

悲痛な心根がダダ漏れつつ、受話器越しに『納期、納期……』と鼻歌交じりの呟き
がしばらく流れて十数秒、発見した旨の報告がハイテンションのうち成される。

『先々週のうちに金型が上がっていて、現在組立中ッス。検品後、ロットが揃い次第、
船便なもんで……二ヶ月後なら確実ッスカねえ。まだ曖昧にしか読めないッスけど、
間に合います？』

「ああ、全然。備品として置いておこうと思っただけなんで、大丈夫ですよ。思
ったよりも早い」

『ネヴェリオ国内でやらせるよりは早いかもッスねー』

教わった期日を殴り書く。ここでいつもの人手不足の話に突入するかと思いきや、
男は何かを思い出したらしい声を上げる。

『そうだ、これと関連して一つ残念なお知らせが』

言うと、男の明るかった声のトーンが落ち、いかにも秘密の話が始まる雰囲気を演
出し始めた。一人で演劇でもしているようだなあと、ムロビシは不意に笑ってしまい
そうになるのを堪えて耳を傾ける。

『ロットラント市内の弊社の星霜データ・プール匣施設、近く廃止の方向で決定したツス』

「あーその件……。廻人ねどが集団で襲撃したとは聞いてますが」

『自分たちだけが搾取されていると不満を唱えていたみたいツス。気持ちも分かるツスけどねー。彼らにとつてはただの風呂じやないし——ともあれ、施設の建設自体、難色を示していた地元住民も多かったつて話ツスよ』

どこか物憂げにぼやく男に、ムロビシは「はて」と眉を顰める。

（ドル箱が被害を受けて大損害だろうに、まさか廻人の方に情けをかけるなんてな……）

直後には何もなかったように会話を立て直すが、ムロビシにはどうも引つかかる反応であった。シグレ交易といえ、金儲けにはとことん積極的なことで名の知れている会社なだけに、なおさらである。

懐疑的なムロビシを知る由もなく、男は続ける。

『一度騒動に発展してしまつた以上、営業再開できないのは当然といえ、当然ツスけど、推進派のみなさんにとつては、よりやりづらくなるかも知れないツス』

「暴動を起こした廻人たちは？」

『現場では取り押さえられただけで終わつたみたいツスけど、その後は——お察しの

通り』

その言葉に、自然を溜息が漏れる。

「……これは、まだしばらく大混乱ですね。ただでさえ新人類計画は問題ばかりだったのに」

『雨が止めば話は違うんツスけどねえ』

ムロビシがぼんやりと憂いていたことを、相手方も同じように嘆く。

ヨサメが突然起動した原因も、雨毒の根本的な仕組みも解明されぬまま、三年の月日が経ってしまった。この間、黒い雨と、それを未だ隠し通そうとするネヴェリオ国に対して抱く思いは、およそほとんどの人間に大きな差異はないのだろう。滅多に他人と交流する機会がなくなってしまった今、ムロビシは電話を介した些細な会話ですらそれを再確認するようになっていた。

「おっさん！」

事の顛末を知らされ、次の言葉を選んでいるうち、玄関ドアの開く音と共に、生意気な少年の大声が飛んできた。

「草刈り、やってやったぞ！ しかも全部、全部だかんな！」

「はいはい、おつかれさーん」

恩着せがましい物言いだが、受話器に手を当て、軽くあしらうように返事をする。ドタドタとわざとらしい足音が近づいていくのを聞きながら、電話相手の男に謝りを入れる。

「すみません、騒がしいのが帰って来ちゃったんで」

『了解ッス！ また何かご用命がございましたら、いつでもお電話お待ちしております！』

「それでは、失礼します」

受話器を置くのとほぼ同時、部屋の入り口をカラスが素通りしていく。後ろをついて来ていたキナリは場所をちゃんと覚えていたようで、ムロビシを見つけて立ち止まると、闇雲に廊下を進み続けていたカラスを呼び戻す。少しの時差を経て、二人が部屋の中へと戻ってくる。

「さっきの、独り言か？」

話し声だけは耳に届いていたようで、カラスがムロビシに問う。

「違うよ。取引先の人と電話してたの」

「デンワ……」

キナリがぼんやりと呟くのに対し、電話をコツコツとノックするように叩く。

「遠くの人と話せる機械だ。最近はやインターネットもほとんど繋がらなくなってきたし、今のところは最強の連絡手段だね。さて……」

椅子から立ち上がり、体を伸ばす。どうにも机仕事は性に合わない。凝り始めていた肩を回しながら、入口付近の流し台へ。カラスとキナリが目覚めた際に食した昼食分と、さらにその前にムロビシが一人で使用した食器が重なっている。

「洗い物、片づけなきゃなあ」

家事は面倒だから後回しにしちゃうんだよね、と二人に言っ、蛇口を捻る。キナリはこれから何が始まるのか気になる様子だが、カラスの方はまるでどうでもいらしい。

「なあ、おっさん」

間髪入れず何かを言い出す素振りを見せたと同時、予想していなかった平手打ちがムロビシの背中を襲う。

「痛い！」

「頼みたいことがあるんだけど」

「なんで殴る必要があるのよ」

「手の暇潰し」

洗剤を含ませたスポンジをくしゅつと握り、泡を立たせてから食器を洗う。キナリは一連の動作を、目をぱちくりさせて凝視している。

「……どんな頼み事かな」

「ヨサメに連れてけ」

「はあ。それは無理だ」

ムロビシは一寸の迷いもなく断言する。見事な玉砕。カラスは一瞬呆気に取られるも、すぐにいきり立つ。

「何でだよ！」

「ヨサメは兵器だって説明をしたらどう？ 兵器っていう物は、民間人が気兼ねなく近寄れるものじゃないの。まあ、ちよつとランドマークタワーっぽくはなっちゃってるけど」

不具合が起こるとすぐに声を荒げるカラスの短気にもそろそろ慣れたのか、キナリは動揺もせず平淡に眺め、その裾を引つ張る。苛立ったまま振り向いてきたところへゆるりと首を横に振って見せると、カラスは不満を隠し切ることはできずも、言葉を飲み、気持ちを多少落ち着かせた。

「……ヨサメの近くに行くくらいはできるだろ」

どうやら外にいるうち、彼らなりに会話を重ねてきたらしい。形振り構わず殴りかかってくるかと思っていたが、カラスの手綱はキナリがきちんと握ったようだ。二人の物覚えの良さを目の当たりにして、カラスの譲歩に頷く。

「それはもちろん可能だ。限度はあるけどね。ロットラントへ行く用があれば、ヨサメには嫌でも近づかなきゃならない」

「それだ！ そんなときオレも連れていけ」

「連れて行くかどうかはカラスくんの普段の態度次第かな？ そういう横柄な言葉遣いを顧みるのなら、考えてあげてもいいかもね」

からかうように大笑するムロビシに、カラスはまんまと乗せられて歯を剥き、食い縛っている。その後もいくつか分かりやすい応酬を続けると、再び蛇口を捻り、洗い終えた食器を流水に晒す。時折勢いが弱まったりするものの、透明な水は音を立てて無限に溢れ出てくる。

「……きれい」

少し遠目に眺めていたキナリが、じりじりとムロビシの近くに歩み寄る。

「……触ってみてもいい？」

「いいけど、ただの水道水だよ？」

「うん」

許可を得、流れ落ちていく水に恐る恐る手を伸ばす。指先に水が触れると、かなりの冷たさを覚える。キナリの細い指に行く手を阻止された水は自在に形状を変え、音を立てて流し台の排水溝へと姿を消していく。何度か同じようにして戯れているキナリへ、ムロビシは説明してやる。

「雨毒でもなければ、星霜匣溶液でもない、何の変哲もない水だ」
キナリがそれに顔を上げると悪戯も終わったため、最後の食器を洗い流すことが叶う。

「どう違う？」

「そうだな……。君たち廻人の視線で考えるなら、雨毒は有害、星霜匣は無害、普通の水は使い方次第ってところかな」

水を止め、手を拭く。

「さて……取り敢えず夕飯までやることもないし、自由にしてもらって構わないよ。外に出るときだけは声をかけてちょうだい」

ムロビシの言葉に、キナリは少し目を大きくする。待つてましたと言わんばかりである。

「字の練習」

「いいよお。仕事も片付いたし、いくらでも教えて——」

聞くまでもなかった少女の願い事を快諾しようとしたムロビシの視界の外れに、とある物体が入り込んだ。それは建物の外に存在しており、ゆらゆらと動いて、建物との距離を縮めていた。

もうそんな時間か、とムロビシは頭を掻き、キナリに一旦断りを入れる。

「ごめん、キナリちゃん。その前に一つだけ優先したいことができた」

「……」

「すぐだから、すぐに終わるから！ ちよつとだけ待って！」

「男に二言はないから！」とだけ残すと、物に溢れた部屋を足早に出て行く。落ち着きのない性分のカラスにはこういった状況は愉快に感じるのか、ムロビシの後を追おうとキナリの横を通りがけ、一言見舞う。

「振り回されてやんの」

「……うるさい」

むくれるキナリを愉快気に笑ったのはその一時だけで、廊下に身を乗り出し、玄関を開けたムロビシの方を向くと、カラスの表情は瞬時に引き攣ってしまった。

何があつたのか。キナリも遅れてカラスの背に辿り着いてから目線を揃えると——二人並んで同じように静止してしまふのであつた。

ムロビシが慌てて迎え入れたのは、先程一人でふらりと出掛けていったアカアリだつた。カラスとキナリが外で彼女を見送つてから一時間ほど経過しただろうか。決して長い時間ではなかつたはずなのだが、それに反して、彼女の風貌は著しい変化を遂げていた。

何を考えているか分からない表情は一つも変わらないが、その顔面と毛髪、両手の大部分が真っ赤に濡れているのだ。彼女の纏う息の詰まるような異臭から、それが血液であることは即座に理解できる。黒いため見づらいが、やはり衣服にも多少の飛沫が付着しているらしい。骨張つた手には人の頭ほどある大きさの布切れが握り締められており、これも大きく血に汚れている。

ムロビシには何が起こつているか具に把握できているのだろう。呆れたようにいくつかぼやきながら、特に暴れる予兆も見せず佇むアカアリに、手招いて行く先を誘導する。さすがのカラスとキナリにもアカアリが外で何をしてきたのか、自身の被害を思い出せばおおよそ想像つくのだが……一つだけ、無性に気にかかる点があつた。

それをカラスがムロビシへと問う。

「そいつ、なんで口の中まで血だらけなんだ？」

ムロビシの声に反応しているのか、アカアリは「う」とだけ呻くのだが、その際わずかに開いた口唇、さらにその奥に隠れていた前歯も、色水を飲んだかのように見事な赤色なのである。

様子を伺いつつアカアリの腕を軽く引くムロビシは、とある小さな部屋へと足を踏み入れつつ、苦笑いを浮かべて答える。

「時折かじっちゃうんだよね、死体のこと」

悪戯つぼく話すムロビシに、カラスは嫌悪に喉を鳴らした。

「……それって食ってるってことかよ」

「いや、噛むだけ。子供みたいに、遊んでいるうち口に放り込んだらうね」

容易に想像できてしまうだけに、返す言葉もない。有事であっても自分は死んだ相手にまで歯を立てることはしないだろうと、ある意味でカラスは冷静に考える。

「夕暮れ時と深夜帯に近所を徘徊する癖があつてね。最初の頃は何を仕出かさか知れないから後ろについて歩いてただけで、特に用があるわけでもなくぶらぶらして帰ってくるだけだから、このところは雨以外の日は放置することにしてるんだわ。で、たまにこうして悪戯が過ぎるときもあるわけ」

ムロビシが部屋の明かりをつけると、壁にシャワーが引つかかっただけの狭い空間が浮かんで出てきた。アカアリは体を左右に小さく揺らすと、手に持っていた布切れを床に落とし、シャワーの目の前に立ってヘッド部分をじっと見つめる。

「……あのアカアリの感じ、水道見てたときのキナリと似てるな」

カラスに鼻で笑われ、そんなことはないと言い切られ捨てるキナリ。雑話を繰る少年少女を脇目に、ムロビシが床に置き去りにされた謎の布切れを拾い上げ観察してみれば、それが袋状であることに気づく。カバンというやつだろうか……キナリは関心げに眺める。

「相手が人が獣かは日によって汚れ具合で何となく予想できるけど……今日やられたのはその辺を通りかかった通行人だなあ。暇を潰しに襲い掛かって、満足するところやって名残惜しげに手土産をぶら下げて帰ってくるらしい。何らかのお肉の塊を持って帰ってこられたときには困ったっけ」

「最初から外に出さなきゃいいだろ」

「そんなこと続けてたら俺がミンチにされちゃうよ。被害者さんには申し訳ないが、運が悪かったとあの世で悔やんでもらおう」

どれほど本気で悪びれているのやら知れない。ムロビシを蔑視していたカラスだっ

たが、目が合ったと思うと、突然血塗れのカバンを投げ渡された。意表を突かれて驚きつつも、なんとかして落とさず受け取ることに成功する。

「あつぶねーな！」

「中身、開けてみな。今日はなかなか当たりだ」

「はあ？」

両手で抱えていると、すでにキナリが横から見つけたらしいボタン式の蓋を開けていた。ごそごそと手を突っ込んで中から取り出したのは、掌大の革製の入れ物のみ。それが何物なのか、くるくると半回転ほどさせて観察しているうち、キナリの手から滑り落ちてしまう。床に当たったそれは、衝撃を受け、真ん中から展開して長方形に変形。その一連の様子を認めると同時に、中に入っていたらしい円形の薄い物体が飛び出し、甲高い音を立てて散らばっていく。それぞれが転がったり回ったりし終えて静かになる頃、カラスがすかさず横槍を入れてくる。

「どんくせーな」

デリカシーのない少年をムツと睨みつけてから、散り散りになってしまった円形の小物を一枚拾い上げてみる。金属でできているらしいそれには精密な刻印がなされていた。これは恐らく――。

「お金？」

「正解。落とした入れ物の方は財布だね」

ムロビシはわざとらしく指を鳴らす。

「臨時収入だ。二人のお小遣いにしていいよ」

「……追い剥ぎは駄目だって、さつきムロビシ言ってた」

「言ったねえ。当然、警察を始めとする治安機関に見つかったら立派な犯罪者だ。でもね、わざわざここまで巡邏に来るような人手はないのよ。やっちゃ駄目だけど、過ったところで咎められることもない。このネヴェリオって国は、もはや法治国家とは呼べないよ。——さっ、アカアリ」

哀れむわけでもなく、蔑むわけでもなく。どこか余裕さえ窺える調子で言い終えると、ムロビシは未だにシャワーを睨み続けていたアカア리를呼ぶ。一度目は案の定無反応だが、二度目の呼びかけでようやく振り向いたアカアリの目をしっかりと見、両腕を勢い良く水平に開く。

「はい、腕上げて！」

「……」

「こう。いつもやってるでしょ」

大袈裟に腕を上下させて見せる。一見、かなり滑稽な光景だが、アカアりに真似するよう促すためのジェスチャーのようだ。しばらくムロビシの動きを追って目をキョロキョロさせていたアカアリであったが、何度目かの時点で彼が動きを止めたと思うと、「うう」と呻き、腕を力なく曲げ、肘が腰の辺りに来るまで腕を上げた。その肘をムロビシがもう少しだけ手で押し上げたと思うと、アカアリの胸元で留まっていたフアスナーを下まで一気に下ろす。最後の留め具までは外れなかったようで、フアスナーを何度か上下させるムロビシの様子を怪訝そうに眺めるカラスの隣、キナリは目をぱちくりさせる。

「ぬ、脱がすの」

「え？ あー……こいつ、一人じゃシャワー浴びられないからね」

キナリの焦燥を察したムロビシは一瞬だけ言い淀みつつも説明し、最後にカラスへと目を滑らせてニヤツと笑う。

「カラスくんは、見たい？」

「あ？」

「アカアリの素っ裸」

「そんなモン見てどうすんだよ」

ムロビシの思惑を根本から理解できていないらしいカラスを、慌てふためき部屋の外へと押し出すキナリ。

「だッ、だめ」

自分でも何が駄目なのか全く分かってはいないのだが、とにかくカラスにだけは見せてはいけない光景が待っている気がしてならなかった。反射的に行動したがために、カラスの機嫌は一気に坂を転げ落ちる。

廊下に戻されるなりキナリの襟口を絞め、手前へと引き寄せて怒気を放つカラスを抑えるように——なのかは定かではないが——ムロビシが声を上げて大笑いする。それにカラスは一瞬だけ素っ頓狂な表情を浮かべて停止。

「いやあ、まじか……！ つくく、そうか、キナリちゃんだけか、恥じらいがあるのは。これは気苦労が絶えないね」

いつ顔に拳が飛んで来てもおかしくないと目を瞑って堪えていたキナリだったが、ちらりと右目だけを薄く開け、カラスの注意がムロビシに向いたのを見る。激昂を再燃させたカラスは、心底気に食わない様子でムロビシに睨みを利かせている。

「なに笑ってんだ」

「カラスくんよりキナリちゃんの方がちよっとオトナだねって話」

格闘を続けていたフアスナーが分離する。布が噛んでいたらしい。

「つていうか、今のはキナリちゃんじゃなくおいちゃんに怒るべきところでしょうよ。苦しそうだ、手離してあげな」

間に入られて興が冷めたのか、全く納得はしていない顔だが、言われた通りキナリを手荒に放す。何度か浅い呼吸を経て落ち着きを取り戻したキナリは、カラスと目を合わすこともせず、つんとそっぽを向く。至極当然の反応なのだが、今のカラスにとつては、誰しもの、どういった行動も神経を逆撫でする要素でしかない。

「……そういうことなら、おっさんを殴っても文句ねーよな」

「どういうことかね……。せつかくアカアリも静かにしてるんだし、少し頭を冷やす練習でもしてなさい」

「うっせー！」

どう楯突こうが簡単にあしらわれてしまうカラスは、周囲の物に当たり散らして鬱憤を晴らそうとしたのだろうが、部屋を一瞥しても家具らしいものはない。唯一目に留まったらしい電気のスイッチをがっつんと殴る。明かりはパッと消えてしまったが、キナリがそそくさと点灯し直したため、少年の威嚇行為はあまり意味をなさなかったといえる。ムロビシを指差し、声を張る。

「いいか。さつきも言った通り、オレはテメエの言いなりでいるつもりはねーからな」
格好のつかない状態で捨て台詞を吐き、カラスは三人の前から大股歩きで去っていくのであった。

* * *

『オレはテメエの言いなりでいるつもりはねーからな』

青年は、スピーカーから飛んでくる生意気そうな声を耳にしながら、ずるずると音を立てて麵を啜る。軽くパーマのかかった髪は明るい茶色で、ゆったりとした形状の服も髪に寄せた、黄色を基調とする大人しい風合いだ。

『怒り方のチグハグさの可愛いこと……。二〇分あれば終わると思うから、悪いけど、それまでカラスくんの見張りお願いしていいかな。そのあと、お勉強会しよう』

『……うん』

少女の小さな頷きを最後にスピーカーからは酷いノイズばかり聞こえるようになり、慌てて電源を落とす。無垢材で作られた木目調の机に置かれていた携帯電話を拾い、左の肩と耳を用いて挟み込んで話す。

「——今の素行の悪そうな子がカラス君。もう一人のキナリって子はずいぶんと静かみたい。どっちもアカアりにやられて、昨晚連れて来られたばかり」

『そうか』

電話から返ってきたのは、活力の薄い、暗い男の声だった。青年は食事を止めようとせず相手に問いかける。

「ちゃんと飯食ってる？」

『日に一食は』

「そんな生活してるから体も治らないんだよ」

『アバラ骨ならとつくに本復だ』

「そっちじゃなくて、肺。どうせタバコも止めてないんだろ？」

胡椒瓶の蓋を開けて器の上で何度も振るが、中身が少なくなっているためほとんど出てこない。机の角に軽くぶつけてみても大した変化は起こらず諦める。

『雨で腐ったんだ。タバコぽつきり止めたところで治るもんじゃない』

「治療痕が消えないのは雨のせいじゃない」

『それもどうか。鋭意研究中だろ、名目上は』

電話越しの男は淡々としていた。これ以上の指摘を遮るためか、一方的に話を終わ

らせようとする。

『長話は傍受される。切るぞ』

「飯食ってちゃんと寝るんだよ」

『オカンかよ』

他愛のないやり取りの後、ぶつりと通話は切れた。静寂に包まれた室内、腹が膨れるのを満喫して体を伸ばして、目を閉じ、穏やかな笑みを浮かべて呟く。

「アカアリ……君は本当に、どこまでを理解して生きているんだろうね」

暢気に大きくあくびをする青年の両耳、細工されたらしい複数のピアスが室内灯の光を受けて明滅していた。